
鉄のストラトス

ルーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鉄のストラトス

【Nコード】

N8410S

【作者名】

ルーク

【あらすじ】

時空の狭間に呑み込まれるのを覚悟の上で、世界を護った少年――早瀬浩一。彼はささいな事がきっかけで、生まれ育った世界とは違う発展を遂げた地球へとたどり着く。彼はその世界で、己が正義を貫けるのか――？

これはアニメ版『鉄のラインバレル』と『IS ハイファイニット・ストラトス』のクロス小説です。IS世界が舞台で、原作で描写されていないキャラの心情の一部分等に関しては独自解釈が含まれ

ており、その他にも他作品のネタが含まれていますが、読んでくれた皆様が楽しんで頂けると嬉しいです。感想や誤字指摘、その他の指摘等お待ちしております。

PV27000・ユニーク7000アクセス突破、感謝です。

プロローグ(前書き)

いよっし！ やるぞー！！

プロローグ

光の剣を携え、輝く本流をその背に受けて、紅い鉄の鬼くろがねが、稲妻が乱れ飛ぶ重力変異の渦を突き進む。

操縦桿を握る早瀬浩一は、過去も現在も未来も、己が生涯の炎を全て注ぎ込むかの様な気迫で、ラインバレルを駆る。

溢れんばかりのこのエネルギーは、仲間達がくれたものだ。

——私の全てを、浩一君にあげる！！

——どうせ、一度は無くした命だ！ これで皆を護れるなら、惜しくないさ！！

——命を力に、か……！！ ホントにヒーローみたいで、カッコイイっスね！！

———大丈夫だよ、姉さん……！ 早瀬さんなら……絶対に、やりとげてくれるから……！！

———………うん………！！

———さあ、皆、もうひと踏ん張りだ！！ これが終わったら、全員笑顔で、南の島に行こうぜ！！

———久嵩と石神社長が護ろうとしたこの世界を護ってくれ……！
！ 彼らがそうであったように……私も、お前が正義の味方である事を望む！！

———早瀬浩一、道は我々が切り開こう。後は頼むぞ、正義の味方。

美海、矢島、山下、イズナ、シズナ、道明寺、森次さん——地上にいる理沙子達、レイチェル達JUDA特務室の仲間、加藤機関の奴ら、生きたいと望むこの世界の人達。

死んでいった社長、加藤久嵩、ジュディ達米軍の連中、城崎の親父——皆が託した願いを乗せたこの一撃は、絶対にしくじる訳にはいかない。

皆が護りたかったこの世界を——絶対に護る！

（見えた……！）

内に正双四角錐を抱えた、黒い球体——ハブ・ダイナモ。

あれをエグゼキューターで断ち斬れば、全てが終わる。

多分、自分の命も。少なくとも、もう帰ってはこれない。

それでも構わなかった。

「ぐッ……!!」

重力変異の中心に近づいたせい、より一層激しい振動が襲った。身を屈めて衝撃を堪える浩一の視界に、一人の少女の姿が映る。

——城崎絵美。

必ず、誰よりも上手くラインバレルを扱える様になって、護ってみせると約束して、護れなかった——

(……っ！)

一瞬、自分が今命がけで世界を救おうとしているのは、単なる彼女を喪った事による自暴^{ヤケ}自棄に過ぎないのではないか、という考えが頭を過ぎり——すぐにそれを打ち消した。

俺が今こうしているのは、俺がそうしたいからだ。
義務じゃない。命令じゃない。ヤケを起こしてなんかもいない。

正義の味方として、俺自身の意志で、この世界を救いたい――――
！！

最後の力を振り絞る様な感覚。ハブ・ダイナモを確実にぶった斬れる距離まで、ただ真っ直ぐに向かう。

――城崎。

――お前は護れなかったけど、それでも。

――俺はこの世界を、そこに生きる人達を護りたい。

――それが俺の正義なんだ!!

「うあああああああああああああああああああああ
あああッッッッッッッ!!」

全てを込めた一振りが、黒い球体を切り裂き――

巨大な波が、紅い巨人を呑み込んだ。

「むむ……？」

機械の部品が散乱するケーブル樹海に鳴り響いた音により、その部屋の主は微睡みの内に沈もうとしていた己が意識を、現実世界に引き上げた。

幸運にもすぐ傍にあったガラクタの山に手をつっこみ、音源を引っ張り出す。

（んー、むー……）

睡眠不足で鈍る思考で、手にしたものが何だったかを思い出そうとする。

強く興味を惹かれる物ではない事だけは知っている以上、後一瞬でも思い出すのが遅れれば眠りに入っていただろう状況で、それがど

ういうものだったかが頭に浮かびあがった。

これは……

暇潰しで作った、次元間探査センサーからの索敵情報を受信した事を知らせ、その索敵対象物にこの世界の事象の蓋然性境界面と同じ次元振動波を付与し、この世界に誘導する為のコントローラーだ。

まさか反応するとは思わなかった。

索敵対象物の簡易データが、手にしたコントローラーに表示される。人間の肉体と比較しての大質量と、人型に近い形状からして——多分、巨大ロボット。

「W^{うー}O……R^{りい}Y……」

妙な呻きを漏らして、スイッチを押した直後。その肉体は、強制的に睡眠を開始した。

——これら一連の動作は。

目が覚めた時には、もう記憶には無かった。

プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今作はアニメ版ラインバレルの24話終了間際からのI Fの話となります。

皆様の興味を誘う事が出来れば幸いです。次回は随時更新の設定集（ネタバレ注意）を書く予定。

設定（ネタバレ注意、最終更新11／11）（前書き）

ここでは作中の設定について随時書き込んでいきます。無論皆様に楽しんでもらう為なのですが、私のモチベーションアップも兼ねて。

ネタバレの危険ありなので、それを避けたい方はご注意下さい。

設定（ネタバレ注意、最終更新11/11）

R335 『プロトタイプ・ラインバレル』

早瀬浩一専用機の第三世代型IS。待機状態は鉄色のネクタイピンで、ISスーツ装着時は右腰に挟んで持ち歩いている。

何者かがマキナのラインバレルのブラックボックスに創り出していた拡張領域に初期設定の状態で量子変換インストールされており、浩一がこの機体を装着し、肉体が損傷していた絵美が拡張領域に量子変換パススロットされた状態で作中世界へと来訪した。

白い鬼の姿のラインバレルと違い、こちらは兜型ハイパーセンサーや鎧袖型肩部装甲によって黒い侍の様な出で立ちをしており、外見はセントラルの量産型マキナに近い。

だが全くの別機体という訳ではなく、両下腕部の鞘に納められたブレード、両腕部放熱フィン・両脚部放熱システム（*1）など共通項がある。

オーバーライドをイメージ・インターフェイスで制御し、第三世代型兵器として扱う事をコンセプトとする近接格闘型のパワータイプであり、カウンターマシンも組み込まれているが（カラーリングが黒いのはこの為）、試作型の現段階ではオーバーライド共々性能が低い為、軽減出来る負担は小さく連続転送も不可能。

マキナ版ラインバレルに用いられていた超高度装甲システム（*2）やSシステム（*4）の技術が使われており、従来の再生能力は健在。スキンアーマーだけでなくシールドバリアー残量の回復も早められている。

これは高速修復による防御面よりも、損傷によって機体性能が低下する事を防ぐ意味合いが強く、装備・能力の動作を常に安定させつ

つ、持久戦において大きなアドバンテージを獲得している。

コアは束の自作でなく男性である浩一が使用している点を考慮すると、現行ISに使用されているものと同一ではない可能性があるが、これに関しては既存のコア同様ブラックボックスである為不明。

浩一と絵美は、コアを含めたこの機体のデータをIS学園に提供する見返りとして、それらが済み浩一の世界とのコンタクトが可能になり次第、交流としてそちらに送り返すという取引により身分を保証されている。

尚、現行の超兵器を凌駕する為に造られた対マキナ用マキナ”カウンター・マキナ”であるラインバレルの技術が使われている事から潜在的に軍用ISすら上回るスペックを持つ機体として創られた可能性があるが、現段階では単純な推測の域を出ていない。

＊1Ⅱラインバレルの太ももにある赤い格子状のパーツ。情報元はアニメ版ラインバレルDVD7巻の解説書。

＊2Ⅱマキナの外部装甲に用いられている技術。金属性の硬度とある程度の柔軟性を合わせ持ち、尚且つ自己修復能力の妨げにならない。

IS版ラインバレルでは、高速修復の為にドレクスラーソイル（＊3）とのマッチングに使われている。

＊3Ⅱ自己増殖・修復機能を持つ、ファクターの体内にも内包されているマキナの固有ナノマシン。略称”Dソイル”。

厳密には、このDソイルの集合体で出来ている素材及びそれを用いたシステム全体の事を指し、マキナは機体それ自体がDソイルの塊である。

＊4Ⅱマキナの装甲や本体構造、動力を維持する為のシステム。

半導体の素材に出来るカーボンナノチューブを機体各部に組み込み、その中空空間に内包したDソイルを配列し集積回路として用いる事で、マキナの構造体丸ごとを骨格・動力部・コンピューターにしている。

マキナ版ラインバレルを解析した牧曰く、『ラインバレルの機関は他のマキナのSシステムに酷似しており、出力が桁違い』との事。

IS版ラインバレルでは、Sシステムとリンクしたコアをカーボンナノチューブの代用とし、ファクターの体内は勿論、装甲やエネルギー・バイパスの他に、操縦者を包む皮膜^{スキンバリアー}装甲にもDソイルが配列されエネルギー循環を行っている。

言わば、IS版ラインバレルは機体そのものがコアであり、近接格闘用としてパワーと反応速度を中心にスペックが割り振られている。

・補足説明

プロトタイプ・ラインバレルに関しては、16巻巻末の設定資料で”試作段階の時点で後のオーバードライブと呼べる機能が既に組み込まれていた”と記述され、13巻巻末のアマガツ形態についての設定資料によると、原作のオーバードライブとは”連続転送、及びそれを使用する際機体色が黒く変化した状態を指す”との事です。

アニメ版ではプロトタイプ・ラインバレルは登場せず特に設定が決まっていないので、”オーバーライドとカウンターナノマシンが使えるものの、試作段階の為まだ性能が低い”という設定にさせて貰いました。

超高度装甲システム（情報元は、アニメ版をベースにしたPSPゲ

ーム版」とSシステム、Dソイルという呼称はアニメ版の設定です。

近接ブレード《名称未設定》×2

両下腕部に取り付けられた鞘に納められた、ラインバレルの主力武装。

《オーバーライド》

マキナは遠く離れた位置に存在しようとして、自身を呼び出したファクターの元へと一瞬で移動出来る。

これは移動元と移動先を繋いだ異空間を渡る事で行っており、通常はファクターが乗っている状態で実行する事は出来ないのだが、それを可能にするスペックを持つラインバレルがファクター搭乗のままりアルタイム転送を行う事を『オーバーライド』と呼称している。その際はファクターの身体に負担をかけてしまう為、それを軽減する為の『カウンターナノマシン』と呼称される特殊ナノマシンの起動により機体のカラーリングが黒く変色し、ABCで”二番目の”という意味のBとBLACKの頭文字から、レイチェルによって『ラインバレル モードビー modeーB』と名付けられた。

IS版ラインバレルでは、前述の通りイメージ・インターフェイスで操作しているが、要求されるスペックが並ではない為に第三世代型兵器としての量産化には向いておらず、高レベルSシステムのハイパワーと処理能力、驚異的な再生能力による機体性能の維持があってこそ、実戦で扱う事が出来ている。

現段階では、ラインバレルのISとしての稼働率がまだ低い為にイメージ・インターフェイスとのリンクが未完成であり、感情の昂りに応じて力が引き出されるDソイルのシステムがそのまま使われている。

よって、操縦者である浩一^マの精神状態が高くしなければ作動しない動作不安定な状態にある。

テールスタビライザー

Sシステム^{ラスター}の恩恵により、推進・姿勢保持を兼用する主要他方向推進装置となっている。

迅雷

作中世界に來たばかりの浩一・絵美を襲撃した無人機IS。

頭部パーツの形状が、アニメ版『鉄のラインバレル』世界で新型アルマとして運用されていた迅雷と酷似している為、便宜上同名で呼称している。

襲撃した三機全てが浩一との戦闘で大破した為、製造した勢力とその理由及びアルマ版迅雷との関係性や、無人機ISとしての操縦方法や機体の各部機構といったメカニズム等は明らかになっていない。

戦闘データからの推測として、緑色に塗装された一機よりも、白色の二機の方が高い性能を発揮していた事から、所謂一般機と改良機の様な区分けがされている事。

使用頻度から考えて、武装は両脚部装甲にナイフシースごと一本ずつ収納されている対IS用ナイフと、電圧によって低威力連射・高

威力単射に切り替えられる短銃身のハンドレールガン（遠距離攻撃を担当していたのか、緑機は二丁使用していた）が初期装備。
水色ラインの白色機が装備していた、スラスター底部に一本ずつマウントされた鞘に納められた太刀型、薄紫ラインの白色機が展開で取り出した長刀型の近接ブレードが後付装備なのではないか、という事の二点が上げられる。

・補足説明

14巻カラーポスターに描かれている、三機の新型迅雷をIS化しました。

形状としては、黒い全身ISスーツの人型に頭部・胸部・両腕部・左部から右部までの腰部・両脚部の装甲（胸部と両脚部には、アパレシオンの板状電磁迷彩補助ユニットを装備）を装着。

腹回りは白・緑の部分が金属板^{プレート}として装着されて、黒い個所はISスーツがむき出し。

原作にてラインバレルが核ミサイル阻止作戦で使った大型バッテリーユニットを小型化した様な腰背部は、甲龍のスラスターの様に両端がアームで左右の腰部装甲と接続され、両肩の四角い個所は二基^{アンロックユニット}の非固定浮遊部位としてスラスターになっています。

武装の形状は、カラーポスターに描写されている物と同様です。
ハンドレールガンの低威力連射・高威力単射設定は、原作13巻57ページでラインバレル・アマガツの右腕を一発で吹っ飛ばした事、コミックス未収録の82話で連弾が降り注いだシーンの二つの描写が元になっています。

境界より来る者（前書き）

釋廉慎さんから頂けたアイデアにより、ようやく執筆する事が出来ました。

釋廉慎さん、本当にありがとうございました……

境界より来る者

”十二カ国の軍事コンピューターが同時にハッキングされ、制御不能となった二三四一発のミサイルが、一斉に日本へ向けて発射された”。

それが混乱と絶望——そして啞然を巻き起こした、異常な緊急事態の幕開けだった。

結論から言ってしまうえば、手に負えない凶弾の群れは誰一人として人命を奪う事無く、無辜の民の財産を何一つとして壊さなかった。

その歴史的大事件は、た……たった一人の女性の手で阻止されたのである。

その場にいた全員が、皆が皆我が目を疑った。

バイザーが仮面の様に顔を隠している兜。

まるで鎧の如く腕部・腰部・脚部に装甲を纏い、その背部には一対の翼が独立して浮遊している。

薄手のスーツに身を包んだ胸部の膨らみから、黒髪の装着者が女性

である事が判別出来る。

手にするのは、たった一振りの大剣。

近代的・機械的なフォルムをしたそれら全てが、白銀色を主としてカラーリングされている。

それはまさしく、現世に蘇った白い騎士と呼ぶべき姿だった。

彼女はその刃を以って、千二二一発のミサイルを飛翔しつつ叩き斬るという、無茶苦茶な芸当をやったのけた。

それだけに留まらない。

突如として放出した光の粒子を、当時試作型でしかなかった大型荷電粒子砲と成し、放出された熱線が残りの半数を撃ち落としたのである。

超音速の飛行能力及び格闘能力、粒子からの物質構成能力、実用化されたビーム兵器――

これに匹敵する力は、現行兵器の中には存在しなかった。

世界は、空想の産物としか言い様が無い驚異にして脅威の存在を、ただ黙って見ていた訳ではない。

最新鋭機を数多く含めた偵察部隊が、それぞれ日本とその周辺各国の命を受けて現地へと向かった。

目標を分析し、可能ならば捕獲行動に入る。それが無理ならば撃滅する――

それが与えられた任務だったが、彼らは全く歯が立たなかった。

謎の白騎士は、目に見えないバリアーのような物で全身を防御しており、ミサイルでもバルカンでも傷一つ付けられなかったのである。

更に、戦闘機には不可能な急速旋回を、その原因である急激なGを何の苦にもせず、ブラックアウト気絶どころか呼吸困難にすらなっていないかの様に、楽々とこなす機動力。

人間とは思えない判断力と実行力、それを実現させる高速思考。

加えて、圧倒的な力の差を証明するかの様に、部隊員は一人も死ななかった。

彼女には、実戦で相手を生かしたまま無力化させる程の余裕があったのだ。

それでも世界は諦めず、躍起になって部隊を投入したが、更なる性能を見せつけられた。

まるで幻の様に、日没と共に忽然と姿を消されたのである。

レーダーでも目視でも見つけられないステルス能力が駄目押しとな

り、世界は完膚なきまでに敗北した。

ミサイル二三四一発、戦闘機二百七機、巡洋艦七隻、空母五隻を撃破。監視衛星八基を無力化――

たった一機で各国の軍事力を凌駕する、究極の機動兵器。

世界はその名を知ってはいた。

『インフィニット・ストラトス』――略称”^{アイエス}IS”。

全ての現行兵器を凌駕する、ISを倒せるのはISだけ――

『白騎士事件』と呼ばれる一連の騒動が起きる一ヶ月前、開発者の篠ノ之束博士が行った発表を誰も信じず、その成果を認められなかった、宇宙空間での運用を目的としたマルチフォーム・スーツ。

その力を、各国は否応なく受け入れざるを得なかった。

開発国として独占的に技術を保有している日本に危機感を募らせた諸外国の手で、ISの運用を制限する為の協定『アラスカ条約』が締結。

情報の開示と共有が義務付けられ、戦争行為への利用は禁止となり

——そうして、十年の歳月が過ぎ去っていた。

RR-08『ラファール・リヴァイヴ』——フランスのデュノア社が開発した、第二世代型のISである。

この機体の特筆すべき点は操縦の簡易性にあり、それによつて操縦者に左右されない安定した性能を発揮する事が出来る。

更に使える武装と、機体の性能・性質を変更して様々な状況に対応

する為の一式装備『パッケージ』の種類が豊富であり、格闘型・射撃型・防御型と全タイプに変更する事による多様性役割切り替えを実現させていた。

それらを開発する第三者団体（ゲーム機で例えると、本体で使用する為のソフトウェアを制作している会社の事である）が多く参入している事でも知られている。

加えて元々のスペックも、初期開発の機体ならば、一世代上の第三世代型にも引けを取らない。

これらの点が高く評価された結果、第二世代型では遅れに遅れて登場した最後発の機体でありながら、量産型ISとしての市場占有率は現在世界で三位。

十二カ国で正式作用され、許可料を払ってのライセンス生産も七カ国で行われている。

基本タイプは全距離対応射撃型で、山田真耶の手には現在、クラウド社製実弾銃器の五十一口径アサルトライフル《レッドバレット》が握られていた。

抜ける様な青空の下で、火薬銃の乾いた音が響く。

その度に破壊される射撃ターゲットも、止まっている訳ではない。直径二百メートルの第3アリーナを縦横無尽に動き回り、その上連射銃撃まで行ってくる。

それに対処するのは、機械の部品を身に着けた、自由自在に空を飛ぶ人間――

この場では珍しくないが、ヘリコプターの回転翼や飛行機のエンジンによる揚力も無しで飛行し、尚且つ飛び交う弾丸を躲し防ぐという、10年前までならば夢想でしかなかった光景は、長年生きている者には今尚信じられないかもしれない。

ISは慣性制御機能――略称PICというシステムで加速・停止・浮遊を行うのだが、これは基本的に、その場でホバリングをするかのように”浮く”為の機能である。

機体の推進は、多くのIS脚部に搭載されているブースターを吹かすか、PICを使用した一種の反重力システムであるスラスターの出力展開領域を操作するかして行う。

また、操縦者はハイパーセンサーから送られてくる情報により、自身の周り360度全方位を視認する感覚で把握し、処理能力はコンピューター以上となる。

真耶はそれら二つを駆使して射線と弾道を先読みし、背部の翼型多方向推進装置を操り、まるで泳ぐかの様に宙を舞う。

四方八方からの集中砲火を網の目を掻い潜る様に回避しつつ、《レッドバレット》を単発で発砲。

寸分違わず中央に吸い込まれた弾丸が、射撃ターゲットを次々と破碎していく。

「――！」

次いで左方から来る弾幕を、そちらに目を向けずに回避不能と判断。左肩を弾雨の前に突き出し、両肩部ユニットの物理シールドで防御して対処する。

そのまま右腕で射手複数を狙い撃ち、そこに生じた包囲網の穴を急加速で抜けて、浴びたくもない敵弾のシャワーを突破。

急上昇しつつ、その勢いのままに逆上がりの要領で上下反転して射撃、残りを撃ち落としていく。

「精が出るな、山田先生」

最後の一基を撃墜した所で通信が届く。

真耶が二百メートル上空から地上を見やると、インターカムを付けた長い黒髪の女性がこちらを見つめていた。

操縦者の視力を望遠鏡並みにするハイパーセンサーの補正により、黒いスーツを着こなした長身の姿が、視覚補足拡大映像として真耶に映し出される。

彼女の切れ長の目に生えたまつ毛や、引き締まった体つきまでくつきりと見えていた。

濃紺色の機体を降下させて、同僚の元へと降り立つ。

「いえ、これ位じゃまだまだです。早く、織斑先生の様に先生らしくならないと」

そうはにかまれて苦笑を返した彼女は、名を織斑千冬という。

「先生らしい」割には、毎年やかましい馬鹿共に手を焼かされているがな」

「あ、そういう言い方は良くないですよー。皆さん、元気で可愛い生徒さん達じゃないですか」

「ふん。その元気を姦しく使われても、鬱陶しいだけだ」

窘める様な真耶に対し、そっけない対応を返す千冬。

しかし、両者の間に険悪なムードはなく、所謂飴と鞭の様な調和を感じさせる。

現に、千冬は彼女行きつけの飲み屋では真耶の事を名前で呼んでいるのだが、そうしないのはここが職場だからである。

IS学園――

アラスカ条約に基づいて設立された、世界で唯一のIS操縦者育成機関。

学園副担任の真耶は、来年度から来る新入生の入試テストで行う、ISによる模擬戦の教官役を務める事になっている。

その時に備えて、整備を終えたばかりで生徒がいない第3アリーナを、無理を言って訓練に使わせて貰っていたのだった。

あははと苦笑いする真耶が、ふと思いついた事を口にする。

「来年は弟さんが来ますから、もっと賑やかになりそうですね」

「賑やかで済めばいいんだがな……頼むぞ、山田先生」

「はいっ」

背が低めで童顔、大きな眼鏡を掛けている真耶の返事は、見る者によつては頼りにされようとする子供が張り切っている様にも見えた。

千冬の期待に応えようとして、彼女の弟が慣れない環境で肩身の狭い想いをしながら、ISの学習に四苦八苦する所を助ける光景を夢想する。

——いきなりISの勉強をするのは大変ですけど、頑張りましょう、織斑君！

——いえいえ。ここまで出来る様になったのは、織斑君が頑張ったからですよ。

——困った事があつたら、これから私に相談して下さいね。私は先生ですから。

——……い、いけませんよ織斑君。私とあなたは教師と生徒……ああでも、織斑先生が義姉^{ねえ}さんになるなら魅りよ……

——ああ、いけませんよ織斑君！　ああ、ああっ……！

両手を添えた頬を朱く染めて恍惚とする真耶の姿に、千冬は重いため息を吐いた。

「……………しっかりしろ。そんな事だから、小娘共に舐められ——」

——警告！ 高度八十キロメートル上空に、大質量の物体による重力変異が発生！

「————ッッ！」

外見的・性格的に幼く見られようが、真耶は超兵器のISに係わる所か、実際の運用を任せられている人材である。

ハイパーセンサーの警告と補正を差し引いても、有事の際の反応は速かった。

素早く《レッドバレット》の銃口を天に向け、ハイパーセンサーからの情報に対して即時行動出来る様、気を引き締める。

戦士としての力量は千冬の方が上なのだが、彼女は今ISを装着し

ていない。

故に、即座の状況報告を求む。

「どうした!？」

「上空、高度八十キロメートルから何かが来ます!」

専門ではないから詳しくは知らないが、ISが使う武装の中には空間の制御が関係しているものも存在するので、聞いた事がある。

一般相対性理論によると、何もない空間に時空の歪みが発生する場合、そこに質量のある物体が出てくると。

真耶には、一般人の目では到底届かない遙か彼方、大気圏と宇宙の境界線で起こる光景が見えていた。

突如として稲妻が中空に迸り、その中心点から発生した眩い白色光が渦を巻き、そこに穴が開くようにして漆黒の空間が除く。

そこに、それはいた。

それは白い鬼だった。

側頭部から伸びている、細長い二本の角。目元が赤く縁どられた二つの碧眼。

帽子の顴^{つば}を短くした様な、赤い菱形の額。楕円形を半分にしたビート版の様な頭頂部には、黒い三つ巴が刻印されていた。

口には牙の様なラインが浮かび、首からは二つのケーブルが覗き、胸部の中央は目玉に見える。

両肩部は中央に小さく黄色い菱形がある、上下に細長い突起が付いた怒り肩だ。

両腕には小型の盾の様なパーツがあり、その下腕部には刀を納める鞘が取り付けられていたが、そこにあるべき獲物は見当たらない。

小さいシールドがベルトの様に巻かれた腰回り。逆さまにした二等辺三角形の頂点を水平に切り取った様な、一見歩行には適していない形状をしている両脚部。

正面からしか見ていないので判別出来ないが、恐らく踵^{かかと}は存在していない様に思える。

その間から覗く、長方形をした尻尾までをはっきりと認識した時、真耶は思わず呻いていた。

「お——鬼のロボット……………!?!?」

「何…………?」

千冬がそう漏らす間にも状況が変化する。

目玉の様な胸部パーツから黄金の光が膨れ上がり、流星の様に尾を引いて地上へと落下していく。

常人には捉えられない超音速で、こちらの方に——

「————! 山間部の方へ…………!」

そこまで言った直後、ラファール・リヴァイヴのハイパーセンサーが、真耶の意識に直接データを送り込んだ。

「————!?!?」

————R335『プロトタイプ・ラインバレル』。操縦者早瀬浩一。戦闘タイプ近距離格闘型。第三世代型兵器搭載————

全てのISは、広大な宇宙空間で互いの位置を把握する為に、『コア・ネットワーク』という特殊データ通信網で繋がっている。
地上で運用されている現在は、通信の他に非限定情報共有シェアリングという機能が使われており、それを通して得られた情報だと理解する。

真耶が驚愕したのはその内容だ。

アラスカ条約により、ISに関する情報は原則として開示しなければならぬ。

だが、遅れて表示されたウィンドウに記されている機体名と操縦者の名前は記憶にない。

（早瀬……浩一……？）

しかも、操縦者はこの名前からして――

「山田先生！ 状況は！？」

連続して起こった呑み込めない事態に困惑していた真耶を、千冬の
一喝が現実に取り戻した。

同僚に視線を向けつつ、全方位視界接続で確認するが、そこには時
空の歪み——なのだろうか？——も鬼のロボットの姿もない。

「は、はい！ 学園付近の山間部に落下物——アンソウ所属不明の第三
世代型ISです！」

「何だと……！？」

第三世代型ISは、各国がやっと一号機を創り出せた試作段階とは
いえ、現在の最新鋭機である。

そんなものが突如現れる事態など、非常時以外の何物でもない。

「先行して偵察を！ すぐに教師部隊を送る！」

「はいっ！」

全うに運用されているISではない以上、放置しておく事は出来な
い。

しかも、操縦者及び機体をあそこまで輸送した者の目的が不明なの
だ。

最悪の場合、付近の住民から死傷者が出かねない。
尋常ではない被害が及ぶ可能性がある。

I Sを倒せるのはI Sだけ。

軽く肩慣らしをしただけの今は、エネルギーの余裕も十分にある。

真耶は突如として現れた謎の機体の元に、愛機を駆って飛び出した。

サイアクな始まり

——Dソイル展開、オープン配列を開始。集積回路の形成完了。エネルギースタート循環開始。

——Sシステム起動。両手腕部近接ブレード《名称未設定》のエネルギー制御、スラスター及びハイパーセンサー、正常作動を確認。

——R335『プロトタイプ・ラインバレル』のフィッティングとパーソナライズは、既に終了しています。

——最新の身体情報フィジカル・データに合わせた、システムの微調整を開始して下さい。

地表へと一直線に降下していく黄金の流星が、山間へと突入すると同時に急停止、その場で滞空して球形を成して着陸する。

やがて光度が弱まっていき、それまで輪郭しか判別出来なかった黒いシルエットが、その姿を現していく。

そうして現れたのは、この世界では広く知れ渡っている機械——I

Sだった。

殆ど黒一色と言っているいいカラーリング。

頂点を水平に切り取った、逆三角形の両脚部。付け根に排気口が見える両腕部。腰部には小型の盾が横一列で並び、胸部装甲の中央は白い目玉に見える。

特徴的なのは、戦国時代の侍が身に付けていた甲冑の様なデザインをしている、肩のアーマーと兜。

両下腕に取り付けられた、刀が収められた鞘。

そして、それを装着しているのは――黒いスーツを着込んだ、少年だった。

「……………う……………」

ゆつくりと瞼を開けると、燦然と輝く太陽の姿が映る。
思わず目を細めた時、それを奇妙に感じた。

——眩しく………無い………？

三半規管と土の感触で、自分が地面の上に寝そべっている事を知覚する。

青空に向かって伸びていく木々と、真後ろの土の粒、それに混入している石ころが見える。

まるで、両目に横や真上、後ろの景色が送られているのを見ている様な、そんな感覚……

「——っ!？」

次いで、情報が意識に直接送られてくる。

——マキナのものが用いられている操縦方法と、それによる基本動作。

——機体の特性と性能値。^{スペック}

――装備と装甲残量の状態。

――ハイパーセンサーの精度とレーダーの探知範囲。

――エネルギーの保有量と出力限界、それによる活動時間と行動可能範囲。

他にも膨大かつ多種多様な情報が流れてくるに至って、浩一の意識は完全に覚醒した。

上半身をむくりと起こす。

だが、それは重力に逆らった勢いではなく、中空に浮いている状態で身体を傾けての動作だった。

まるで、宇宙にいた時の様な……

分……か……っている。

何故浮遊しているのか。どうやればどこまで飛べるのか。

「何だよ……これ……?」

目の前に掲げた両腕は、刃物の様に鋭利なデザインのマニピュレーターが五本の指に装着され、ラインバレルの様に、刀が収まった鞘と放熱システムが取り付けられている。

知……っ……ている。

この機体がオーバーライドを使えるという事。
それがコンセプトの一つである機体という事。今は未完成であるという事。

これがマキナではなく、ISという機械である事。

名前が、『プロトタイプ・ラインバレル』という事も。

白い鬼ではなく、黒い侍みたいな姿をしているが――

「これ――ラインバレル、なのか……？」

眼を向けずとも見える、オーロラで赤く不気味に彩られていた頭上の空は、元の青さを取り戻していた。
太陽を覆い隠していた、ついさっき中心をぶった斬ったばかりの時の空のゲートも見当たらない。

俺……この世界を護れたのか……？

ここ、御崎町の山なのか……？

——何となく、違う気がする。

「ここ……どこだよ……!?!」

首を左右に巡らして辺りを見回す。
声が上がらず。

気が付いたら知らない山の中にいて、ラインバレルに酷似している
とは言え、知らないロボットの様な装甲をいきなり身に纏^{まと}っている。
浩一の心に、知らない間に身体を勝手に改造された様な不安感が募
っていた。

何で、山の中にいるんだよ。

俺、ラインバレルのコックピットにいたのに……

「——!?!」 城崎……!?!

浩一の思考回路に火花が散った。思わずがばりと立ち上がる。

彼女の――考えたくはないが、死んだ彼女の身体は何処へ？

マキナのラインバレルのкокピットの中に、置き去りになっているのだろうか？

だったら早く呼んで――！

そこまで考えて、今度は仲間達――特にファクター達の安否が浮かぶ。

『ラインバレルに全エネルギーを送った』という森次の言が思い出されたからだ。

それでヴァーダントらが停止したら――ファクターは、生きていない。

マキナのシステムに詳しい訳ではないが、一度、エグゼキューターにラインバレルのエネルギーを使い過ぎて死にかけた事があるから分かる。

道明寺と、加藤機関の沢渡とユリアンは無事だろう。

ハブ・ダイナモをぶった斬る直前まで通信が届いていたし、乗っているのはアルマだ。

けど……J U D Aに避難してる理沙子達は？

それに、森次さん達は——！！

早くラインバレルを呼んで、通信で、緒川さん達に連絡を……！

「——っ！」

浩一はいつもの様に、声を上げてラインバレルを呼ぶ事を決断した。
I Sにも通信機能があるが、これで脱出艇に繋がるかは分からない。
城崎を見つけない。

「来い！　ラインバレル——」

——ジジジ、と空間にスパークが散った。

「な……何だ!？」

左方でそれを目撃した浩一が、突然の放電現象に向き直る。

その時には、うつすらと輪郭が見える三つの人型が現れていた。

「これは……!」

——電磁迷彩!

向こう側が透けて見える立体が、徐々に彩度を強めていく。
そうして現れたのは——

「迅……雷……?」

浩一の言葉に、そうして疑問符が付くのも仕方のない事であった。

彼が知る迅雷は、二十メートルの巨大ロボット『アルマ』であり、曲線的でスリムなデザインをしていた。

だが、目の前にいる三機の形状は、それとは異なっているのだ。

それ所か——プロトタイプ・ラインバレルの様に、人が身：……に……着……けて……いるのである。

顔面全体がシャッターの様な格子状だった頭部が、両目だけを出す様に黒いラインが目元に浮かんでいて、額には陰陽師が使いそうな黒と白の人魂が入り混じった様なマーク（陰陽勾玉巴という言葉を浩一は知らない）が刻印されている。

中心が虫眼鏡のレンズの様だが、胸部装甲はマキナと同じで、アパレシオンの様に板状のパーツが取り付けられている。

両肩の辺りには四角いスラスタが浮遊していて、正面から見ている為に形状が分からないが、後背にも背負う様にアーマーが存在している。

ダイバーが着る様な肌にぴっちり張り付く黒いスーツを身に着けた人間が、そうした装甲を装着している様に見えるのである。無論両腕部と両脚部もそうで、腰部にも幾つか金属板プレートが取り付けられており、全体的に直線的な外形フォルムをしていた。

何よりも違うのがカラーリングで、プロトタイプ・ラインバレルの様に殆ど黒一色だった塗装が、二機は白、一機は緑に塗られている。他にも、胸部の先端等所々が彩られていて、緑色は赤、白色は薄紫と水色のラインが引かれていた。

人が身に着ける装甲。スラスターだと理解出来る、浮遊している一部のパーツ。これは――

「IS、なのか……？」

浩一がそう漏らした直後、三機の迅雷アクションが行動を起こした。

手元から光の粒子を放出し、収束させたそれから武器を形成したのである。

細身の長刀が、薄紫機の右手に。
ペインキラーが使っていた逆手持ちのレールガンが、水色機の左手と緑機の両腕に握られている。

「これは……！」

『オープン展開』——！

それを認識した直後、水色機が発砲してきた。
咄嗟に上空に逃れた浩一の身体が、両足から勢いよく縦回転する。

「くッ——！？」

余計な勢いが止められない。

その場に踏ん張る様にして、ようやく静止する。

「何だよお前ら！！　いきなり攻撃して……」

浩一が困惑の怒声を上げる間にも追撃が迫った。

水色ラインの迅雷が両肩の浮遊スラスタを吹かし、その底部にマウントされた鞘に納められたブレードの柄に手を掛けて接近してくる。

「くそっ……！」

浩一も咄嗟に左下腕の柄を握り、両機が抜刀と同時に斬撃の軌道に入る。

マキナは、ファクターの電気信号を読み取る事で操縦出来る。

その際は、マキナの目から見える映像がファクターの視界に映し出される——つまり、実戦では刃物や銃弾が迫る恐怖がモニターを通してではなく、実際にやられた様にリアルに襲い掛かって来るのだ。どちらかと言えば、”ファクター自身がマキナに変身する”という感覚に近い。

故に、生身での戦闘経験が皆無であった浩一でも、実戦経験がある以上全く対処出来ない訳ではなかった。

甲高い金属音の後、お互いが肩手持ちにした刀を互いに力で押し合う格好になり、パワーはこちらが上回っている事を実感する。

このままブレードを弾き飛ばして——！

そう実行しようとした刹那、左腕のレールガンで至近距離から銃口を向けられた。

連射される頃には力比べを断念して身を引いたが、やはりブレーキが利かず、体制が崩れた所を緑機に狙われる。

思わず両腕を交差させて身を庇う浩一が目を閉じる間も無く、二発の砲弾が直撃して爆炎の華が開く。

「ぐあああッ……！」

四散するかと思われたその身は、六角形ヘックスの集合体で構築された光の壁によって護られ、原型を留めていた。

勢いよく吹っ飛ぶ身体を、浩一はその場でたたらを踏む様にして制動する。

「ッ……！　な———」

何とか姿勢制御をした所で、浩一は眼を瞠みはった。

見た事が無い物が、その眼に映ったのだ。

自然と、ハイパーセンサーによる資格補正の倍率が上がる。

円形のグラウンド。幾つかある野球のスタジアムのような建物。奇妙に曲がりくねった塔。

その他幾つかの建物等が、ここから離れた島に存在している。

あんな物——御崎町所か、自分の世界には無い。

「くっ……まさか……」

確信を得る間は与えられそうに無かった。

三機の迅雷が浩一を取り囲む様に浮遊し、それぞれ手にした刀を構え、レールガンの銃口をこちらに向けてくる。

「くっ……！　そうかよ……だったらッ！！」

浩一は手にする近接ブレードを正眼に構え、目の前の危機と相対した。

サイアクな始まり（後書き）

今回は、一部の展開が釋廉慎さんから頂けたアイデアが元になっています。釋廉慎さん、またまたありがとうございます。

——台詞少ないなオイ（汗）。まあ、次の次は会話パートなんです。

正義の味方、再起動

『うおおおおおッッ!!』

スラスターを吹かし、その勢いのままに繰り出した突きは、ひらりと左に体を捻りながら躲かれた。

そのまま上下反転しつつ、右足で放った緑機のオーバーヘッドキックが、左側頭部に直撃する。

「あああああっ!!」

まるで、荒れ狂う海に吞まれて、映像のノイズの様に自分という存在そのものが乱れる様な感覚。

肉体的苦痛こそ感じないが、身体がバラバラになっていくのではないかという精神的疲労が蓄積していくのを感じていた。

「——ッ！」

素早く持ち直し、眼前のモニターに映るデータ類に調整と修正を加えていく。

彼女：彼女は理解していた。

自分がなぜここにいるのか。自分が今やるべき事を。

真耶は木陰に身を潜め、四機の所属不明ISにコア・ネットワークで感知されない様、潜伏モ―ドという機能を使い、視覚補足拡大映像で戦況を監視していた。

その表情は、困惑によって微妙に曇っている。

（あの機体……）

プロトタイプ・ラインバレル―非限定情報共有で情報が送られてきた、あの白い鬼の様な巨大ロボットと対を成して黒い、侍を連想する近距離格闘型らしきIS。

飛行速度と斬撃の鋭さ、敵機とのブレード同士の拮抗具合から判別出来る出力。

三機の連携攻撃に対応する際の反応速度。

現行機の第三世代型ISにも引けを取らない——いや、その中でも最高位ハイエンドと言っている程のスペックだと確信する。

だが、明らかにそのバランスが取れていない。

機体の反応速度とスラスタの出力が合わない過……ぎているせいで、攻撃にしろ飛行にしろ回避にしろ、移動する度に勢いよく流されている。

現にその操縦者——『早瀬浩一』は防戦一方だった。

水色機へ刀を横薙ぎに振るうが、ブリッジする様に上半身を仰向きにして回避され、その体勢で繰り出されたハイキックで反撃された。

続いて、薄紫機がバレーでも踊るかの様に身体を横回転させつつ、右手に握った長刀を振り下ろしてくる。

ブレードを頭上に掲げて受け止めた時には、緑機が充分に電磁力を溜めた二丁のレールガンを撃ってきた。

慌てて距離を取れば、水色機の連弾を喰らう羽目になっている。

彼の攻撃が力任せだという面もあるが、量産型と思われる新たな所ア属不明ISの性能も高い。

早瀬浩一は、何故プロトタイプ・ラインバレルの第三世代型兵器を使わないのか。

機体共々未完成だった時を、あの三機に襲撃されたのだろうか……？

では、あの鬼の様な巨大ロボットは何なのだろう？　そもそも、何故ここへ墜落した途端に襲われている？

（それに、あの三機……）

それぞれ白と緑を基調としてカラーリングされた、直線的な外見フォルムの機体——恐らくは、リヴァイヴと同じ機動性重視のISだろう。だが、それを考慮しても運動能力が尋常ではない。

加えて、ハイパーセンサーの補正下にある今ですら、動きのリズムや乱れが全く感じ取れない。あまりに機械的過ぎる。

「……………」

まさかという過トった想いは、早瀬浩一の危機によって中断された。

水色機のレールガンを喰らってプロトタイプ・ラインバレルの力が緩んだ瞬間を見計らい、鰐迫り合いをしていた薄紫機が長刀を押して突き飛ばし、腹部を強かに蹴りつけたのだ。

体勢を崩して流されていく彼を狙って、緑機が二丁の銃器を構えた。無論フルチャージ済みで、銃口からバチバチと放電が漏れている。

（いけない！）

ISの防御機能は、肉体を外傷から護ってはくれるが、相殺しきれない分の痛みは消してくれない。

あのまま砲撃を喰らって気絶したら、良い的になってしまおう——！

戦闘エリアに接近した時から、指揮権を持つ千冬との通信が出来なくなっていた。

プロトタイプ・ラインバレルか、新たな所属不明ISかのどちらかによるジャミングだと思われる。

眼前で行われている戦闘は学園側も気づいているだろうが、増援は状況が分からない為下手な手出しはせず、付近の住民に被害が及ばない様警戒しながら、両機に気づかれない様気を配る必要がある為に、こちらに来るまでもう少し時間がかかると真耶は見ていた。

そうなると自身の判断による単独行動しか選択肢が無くなるのだが、一連の戦闘を見る限り、調整が成っていないプロトタイプ・ラインバレルは脅威ではなく、自分一人でも充分取り押さえられると判断出来る。

所属不明三機の手で早瀬浩一が死亡してしまったら、あの機体を何の目的で開発したのかとその経緯が聞き出せなくなる。

それは彼女の立場としても、山田真耶個人としても看過出来なかった。

故に、子供の危機に駆け付けたい心情を堪えていた真耶はすぐに飛び出して、手にした《レッドバレット》で緑機を銃撃しようとした。

だが、またしても予想外の出来事が起きた。

プロトタイプ・ラインバレルが、それまでとは違う機敏な動作で砲撃を回避し、自力で窮地を脱したのである。

浩一は、緑機の全力砲撃をそのまま喰らうつもりは無かった。

ラインバレルなら何で思い通り動いてくれないんだよ、と何度も苦虫を噛み潰した、水流に流される様に思い通りに動かない身体でも、何とか避けなければマズいと思った。

マキナの操縦とは違う、自分そのものが空を飛べる超人になった様な全能感を感じたのはその時だ。

思い通りに動く様になった機体を操縦し、レールガンを避けた瞬間
——意識に直接情報が送られてくる。

——最新の身体情報フィジカル・データに合わせて終了した、システムの微調整。

——それによって完了した、グラフィティ・ヘッド偏向重力推進角錐の最適化処理フィッティング。

そして、遅れて表示されたウィンドウに映し出されたのは——

(き——城崎……!!！)

長い黒髪。意思の強い瞳。胸に血の染みがある、見慣れたJUDA
の黒い制服。

ラインバレルのコックピットで、自分を真っ直ぐに見つめてくるの
は——紛れもなく、城崎絵美だった。

分^{..}かる。

何故城崎が生きているのか。彼女がいるコックピットが、このISのどこにあって、何なのか。

『来ます!』

「——ッ!」

棒立ちになっていた自身に目掛けて迫り来る水色機の連弾を、浩一は上空へ飛んで回避しつつ、距離を取る。

「この……ッ! 空気読めよ、お前ら!!」

急に動きが良くなったプロトタイプ・ラインバレルを警戒してか、横一列に集結した三機の迅雷へ向けて、浩一は怒声を叩きつける。しかし、それに帰ってきたのはいつものキツイ台詞だった。

『今は戦闘に集中して下さい! 私のことなんて、気にしている場合ではありません!』

「わ、分かってるよ!!」

言葉だけが意識に直接届き、眼前のウィンドウはもう消えていたが、城崎が笑っているのを感じた。もう、二度と見る事が出来ないと思っていた笑顔だった。

「……………」

本当……………厳しいな、城崎は…………

大事な人が生きてたってのに…………それを喜ばせる前に、状況を分か
らせようとするか、普通？

けど——ナイスな展開だよ！

俯いた顔を上げた浩一には、既に闘志が満ち溢れていた。

『今から、無人機の行動パターンを送ります』

「――！ こいつら、やっぱり……！」

城崎と再会する前から、浩一は眼前の迅雷三機は無人機なのではないかと思っていた。

実際に戦った訳ではないが、プリテンダーと一緒にフラッグを襲撃したアルマの迅雷がそうだったし、さっきまで見せつけられていたアクロバティックさの切れが、人間の動きとは思えなかったからだ。

ラインバレルを手に入れて思い上がっていた時から、コックピットの操縦者諸共有人機を斬って来た。

それでも、進んでそれをやりたいかと言われれば、答えは否である。

無人機相手なら、何の遠慮もいらぬ。

『分……分……
かりますか？』

「ああ……！」

オペレーション・スーパーノヴァ
城崎は衛生兵器破壊作戦で、ヘリオスの制御にシステムの大半を割り、操縦が半自動化したヤオヨロズの行動パターンを分析した事がある。

——戦闘開始時から蓄積していたデータを元にした、敵機の行動パターン。

プロトタイプ・ラインバレルを通して、城崎が教えてくれているのが分かる。

迅雷三機の動きが、簡単に予想できる。

「よおし……行つくぞオツ!!」

二度の宇宙戦と、プリテンダーとの空中戦。グラン・ネイドルの砲火回避。

それら三次元戦闘の経験を武器にして、プロトタイプ・ラインバレルが飛翔する。

無論敵側もただ黙って見ている訳ではなく、即座に散開した三機の内、水色機と緑機が迎撃の弾雨を放つ。

だが——

ハイパーセンサーによる全方位視界接続と高速思考。Sシステムの高出力と反応速度。

二つが見事に融合し、無人機の連弾は黒い機体を追い切れていない。

浩一の全身には、得も言われぬ高揚感が満ち満ちていた。

「俺は――」

右手の銃器を撃たれる前に、左手で緑機の手首を掴んで銃口を逸らす。

敵機は零距离射撃が間に合わないかと判断したのか、もう一丁のレーザーガンを投げ捨て、脚部装甲から飛び出してきたナイフを開いた左手に握る。

「この機体を――」

その小刀が突き出される前に、胸部を袈裟懸けに斬り裂いた。確かな手応えを感じる。

バチバチと青白い放電を始めた緑機の頭部を鷲掴みにして、後方から水色機が放ってくるレーザーガンの連弾から逃れる。

尚も手にした銃器を乱射してくる迅雷へ、大きく迂回する様に弧を描いて近づいていく。

「動かせるッッ!!」

今までの戦闘経験を元にして頃合いを見計い、ブン投げた。

緑機が激突した瞬間に爆発し、吹っ飛んだ水色機が大勢を崩す。

「おおりゃあああッッッ!!」

今度は浩一が追撃を掛ける番であった。

緑機の爆発によって生じた煙を突っ切って接近し、大きく振りかぶった両手持ちの唐竹割りで、水色機の頭頂部から股間までを一刀の元に両断する。

そのまますれ違う様に離脱する頃には、迅雷は残り一機となっていた。

「さあ、次は——！」

お前だ、と言いかけた浩一の口が止まった。

見失った——？ どこだ！

『上ッ！』

城崎の声と共に、ハイパーセンサーが位置情報補足を送ってきた。

最後の一機となった、薄紫ラインの白い迅雷——それが太陽を背にして、急降下しつつ長刀を突き出してくる。

「——ッ！」

浩一は、回避よりも迎え撃つ方を選んだ。

激突しようとするかの様に真上へと飛び、迫ってくるブレードに向けて、手にした武装で突きを放つ。

正面同士からぶつかり合った近接武器は、片方が切っ先から粉々に削られていった。

お互いにすれ違った瞬間、使い物にならなくなった長刀の柄を放り出した迅雷が、粒子からレールガンを構成する。

それは、全方位視界接続によって浩一に見えていた。

「うらあっ！」

身体を反転させて投げた近接ブレードが、プロトタイプ・ラインバレルへと銃口を向けたレールガンを握る左腕へと、引鉄トリガーが引かれる前に吸い込まれる。

敵機はスパークを散らし始めた左腕を、脚部から射出したナイフで肩口から斬り落とした。

一拍遅れて、刀に貫かれた部位が手にした銃器ごと爆発四散する。

「まだやろうってのかよ？」

右手に残ったナイフで構える迅雷に対し、二機を続けざまに倒して勢いづいた浩一が、不敵な笑みを漏らす。

右下腕部に残ったもう一振りの近接ブレードを、左手でゆっくりと抜刀し、利き手の右手に持ち替える。

「けど——これで終わりだっ！」

「そこまでです！」

「——っ!?!」

紫機へ突進しようとした時、不意に横合いから掛けられた声に、浩一は一瞬身を竦ませた。

水着の様なスーツを着た、大きな眼鏡を掛けている女が、銃器を構えてこちらへと接近してくる。

その身体には、濃紺色に染め上がった、四つの翼とシールドを持つ機体。

――RR―08『ラファール・リヴァイヴ』

――五十一口径アサルトライフル《レッドバレット》

機体と武装の照合データが送られて来た時には、同型機を身に着けた女性達が地上の木陰から次々と飛び出してきた。

最初に接触した眼鏡の女が、外見に似合わぬ威厳を込めて勧告する。

「国家認証無しでのIS運用は、刑法違反です。両者の身柄を拘束します！」

拘束――！？

「な……いきなり何言ってるんですか！」

ついさっきまで人類の命運をかけた戦いをしていたら、気が付いた時には知らない機械を装着していて、アルマの様な無人機にいきなり襲撃され、死んだと思っていた少女が生きていて、その上犯罪者扱い。

浩一が目紛るしく展開された事態についていけずに混乱してしまうのも、致し方ない事だった。

仕掛けたのはそっちだ、という反論は、顔のすぐ傍を通り過ぎて行った銃弾によって黙らせられる。

「……二度目はありません」

『……早瀬君。ここは、そちらに従って——』

——眼鏡の女に威嚇射撃された直後、迅雷の身体が痙攣する様にガクガクと震えだした。

『————ッ！』

青白いスパークを散らし始めた機体の姿に、その場にいた誰もが息を呑む。

一拍遅れて球形の光を放ち始めるにいたって、真耶はその現象が何

なのか看破した。

（まさか——自爆！？）

所属不明が無人機だと疑いを持った時点で、想定する事は可能だった。
アンノウン

だが、無人機ISと実際に相対した経験が無い教師部隊は、この瞬間までその可能性を考慮出来ずにいたのである。

彼女らが己の迂闊さを悟る間もなく、所属不明の薄紫機がスラスト
アンノウン
Iをフルスロットルにして、真耶の元へと向かう。

戦闘に関して、真耶の予想外の事態への対応力は決して低くなかったが、状況が悪かった。

自分を含めた教師部隊は、プロトタイプ・ラインバレルを取り囲む為に密集している。

加えて、自爆によるエネルギーの威力と規模が、どれ程のものなのかが分からない。

距離を取って逃げても、仲間諸共巻き込まれる可能性があった。かといって、下手に攻撃を加えて暴発させる訳にもいかない。

一体、どうす――

「止めろオオオオオオオオオオツツツ！！」

真耶は手を出しあぐねていたが、プロトタイプ・ラインバレルは迷う事無く突進し、爆弾の胸部へと刃を突き立てた。

直後、所属不明の機体アンノウンが盛大な爆炎を噴き上げる。

とっさにシールドを前面に出して耐えた真耶の眼には、落下している確保対象の姿が映っていた。

正義への道標 前編（前書き）

本当はもう一段階くらい進ませるつもりだったのですが、途中で詰まってしまったので前半・後半に分けて書きました。
モチベが落ちたら困るし……

正義への道標 前編

「『迅雷』の戦闘に関してですが、通常のシールドバリアーは確認されましたが、絶対防御が発動していません」

ISが超兵器たる所以の^{ゆえん}の一つである自動防御機能には、『シールドバリアー』と『絶対防御』の二種類がある。

一つ目は、操縦者を覆う特殊なエネルギーバリアであり、攻撃を受けた際は瞬時にハニカム構造の盾を形成して防ぐ。

その出力で相殺しきれなかった分の衝撃はそのまま操縦者を通り、受ける度に消耗するバリアー残量が無くなれば破れる。

二つ目は、シールドバリアーで防ぎきれない威力の攻撃を受けた際、操縦者を死なない様に護る為の能力である。

だが、名前に反して絶対無敵ではなく、これをも突破する程のパワーには無論効果が無い。

加えてシールドに使うエネルギーを極端に消耗する為に、装甲の破損やシールドの減少で事が済む場合は発動しない。

報告をしているのは、水色の短髪をウルフカットにした、野性的というよりは知性的なイメージを醸し出している十代女子。

白いIS学園の制服に身を包んだ彼女は、名を更識楯無という。

立派な机の上で両手を組んで話を聴いている人物は、総白髪で顔に年相応の皺しわが刻まれている。

IS学園の運営を取り仕切っている初老の男、轡木十蔵である。

リヴァイヴ真耶機とプロトタイプ・ラインバレルのIS活動記録アウト・ログから引っ張り出して来た戦闘映像が、十蔵の眼前に浮かぶディスプレイに表示されていた。

プロトタイプ・ラインバレルの近接ブレードによる斬撃を受けた際、六角形の集合体による防御壁は破壊されているが、そのまま無抵抗に迅雷のボディが斬り裂かれている。

ISなら必ず備わっている上に、システム設計上カット出来ない絶対防御の未作動。

人が動かす以上、存在しえない筈の無人機IS。

三機の迅雷が絶対防御非搭載型だったのは、機体が無人機の試作型プロトタイプとして創られたが故の弊害、または改良点なのか。

あるいは、量産型故の簡易性によるものなのか――

どちらかは不明だが、使用されているコアがこちらが知っている物と同一であるという保証が無い以上、後者を想定しておくべきだろう。

少なくとも、迅雷を差し向けた勢力はISシステムの根茎に手を出

せる程の技術力を有し、機能中枢であるコアを複数保持し、それを搭載する同型機をも開発していた。

あの三機大破で所持分を全て損失してくれればいいがとは思うが、解明した技術を元に新たなコアを創り出し、それが悪用される可能性が0では無い以上、決して楽観は出来ない。

ISに対抗出来る力は現段階ではIS以外存在せず、国防関係の配備数は決して十分とは言えない。

有り体に言えば――世界の危機だ。

放棄された緑機のハンドレールガンや、プロトタイプ・ラインバレルのマニピュレーターに付着した塗料等の資材からルートを割り出し、敵勢力の拠点を急襲、その技術を根こそぎ――という手もある。

この世界で創られているならば、の話だが。

「早瀬君が、何故ラインバレルを動かせるのか――それに関しては？」

「両名にコンタクトを取らせましたが、”ラインバレル自身も理解していない”という事です。彼らを学園に入学させ、プロトタイプ・ラインバレルの稼働データを取るべきではないかと」

「――そうですね。それに……」

半ば面白がる様な口調で、子供の様に十蔵は言った。

「君自身——彼がデータ通りの男の子である事を、期待しているのではないですか？」

——お前には……分からないだろうな。抵抗したくても出来ない人の……馬鹿^{バカ}みたいな夢に縋^{すが}るしかない人の気持ちは……

——でも、俺には分かる！　そういう人達の気持ちはな！

——今の俺には、戦う力がある……！　確かに、それは城崎から貰ったもので……俺の力じゃない。俺の正義なんて、何の役にも立たないちっぽけなものかもしれない……！

——だけど、なりたいたんだ！　本当の正義の味方に！

「……やっぱり、分かります?」

楯無が苦笑を返す。

そうして覗かせているのは、先程までの真剣な仕事人とは違う、私人としての顔だった。

分からいなか、とでも言う様に十蔵は穏やかに笑いかけた。

「学園、及びその近辺に於ての監視。プロトタイプ・ラインバレルの整備の手配——宜しくお願いしますよ」

更識家は、裏の実行部隊に対する家系——所謂対暗部用暗部の名家である。

昔から裏工作に強い家柄にとって、気づかれない様に監視するなどは造作も無い。

「ええ。これでもかって位、発信機を向こうから付けてましたし」

無論、それを彼に教える様な真似はしない。

——その方が、面白そうである事だし。

悪戯イタズラっぽく笑った楯無が一礼してその場を去ろうとすると、重厚な作りのドアを開いて、二人の女性が入れ違いで入ってくる。

織斑千冬と、山田真耶であった。

二人には悪い事をしている、と真耶は思う。

先程まで繰り広げていた戦いで絵美を”喪い”、それでも彼女の”正義の味方であれ”という想いに応え、己が身を顧みず、仲間達の命の力で人類を護った早瀬浩一。

父親が死んだ時の記憶を思い出したばかりなのに、その後にはちゃんと和解出来ないまま、実の兄を亡くしている城崎絵美。

その上、目が覚めてみれば味方がいない異世界で、いきなり謎の機体に襲撃され、後に受けたのは労いではなく厳しい詰問。

正直、心が痛む。

あくまで、あのデータが事実であればの話だが……

「出ろ」

鵜呑みにするべきでは無いと分かっている、胸中が穏やかではない真耶の隣にいる千冬の手が開かれ、握っていた一つのアクセサリあらわが露になる。

それは後ろに発条バネが付いた、左三つ巴と一本の線ラインが黒く印されている、鉄色をした板状の物体。

浩一が遠藤シズナに渡したものと同形の、ネクタイピンだった。

それから溢れる様に放出された光の粒子が、一瞬にして集結し――

早瀬ハセ浩一と、城崎シロサキ絵美を成した。

「おお……！」

年甲斐も無くはしゃぐかの様に、十蔵が感嘆の声を漏らす。

ISには、拡張領域パススロットという使う武器を量子に変換して収納する為のシステムがある。

自己修復・増殖機能を持つ、マキナという機械が持つ固有ナノマシン”ドレクスラーソイル”――略称Dソイルを移植された人間”フアクター”である二人は、厳密に言ってしまうえば『マキナを動かす為のモノ』。

人間性を持ちながら、人間ではない存在――

プロトタイプ・ラインバレルを分析した結果、Dソイルによってマキナの修復・エネルギー循環を行い、基本構造を司りサポートする”Sシステム”が使用され、コアとリンクしている事が分かった。故に、同型のナノマシンを体内に持つ浩一と絵美はあの機体の一部としても扱われ、システムの微調整等の為の武装として拡張領域に収納する事が出来る。

ISの操縦は初めてであるという浩一が、いきなりそのスペックや操縦方法、絵美が何故”生きて”いるのかを知っていたのもそこに起因していた。

迅雷との戦闘の際、浩一がウィンドウで目にしたマキナ版ラインバレルのコックピットは、それを元にした、絵美が拡張領域に入っている姿のイメージ映像だ。

二人が黒いIS共々この世界に來た際、絵美がその中に収納されていたのは、ネイキッドとの戦闘で大剣によって胸部を貫かれ”破損”していたからだった。
拡張領域では、意識があれば肉体の損傷は関係ない。

マキナのラインバレルが蓄積した戦闘データを学習していたプロトタイプ・ラインバレルのコアは、主に戦っていた浩一を操縦者とし、絵美を武装として拡張領域に量子変換、Dソイルで彼女の肉体を修復させるのが最も効率的だと判断したのだ。

そうして、ISの自動調整機能では対応しきれないシステムの微調整を、絵美がプロトタイプ・ラインバレルに教えて貰いながら、浩

一の最新身体情報を元にして完了させ、反撃を開始。
最終的に残り一機の自爆から自分を庇った事で、プロトタイプ・ラインバレルが操縦者共々ダメージを受けた。

その後黒いISを学園まで運び、昏睡状態になった浩一を拡張領域に収納、その中にいる二人のデータ化された記憶を大体見せて貰った。

絵美からの証言と合わせての事情聴取もあったが、この世界ではDソイルの活性剤など開発されていない。

浩一の負傷を直すには、拡張領域に入った絵美が活性剤の代用をするのが最適だったのだ。

ISにも操縦者保護機能があるが、あれは出血などの悪化を食い止めるだけで、怪我を直すには病院等で治療が必要になる。
絵美から聞かされてはいたが、活性化再生治療も受けずにこの回復力……ファクターが人間離れしている存在だという事を、改めて思い知らされる。

「山田先生。この二人は人間ではない。モノだ」

「――！」

まじまじと見ている姿から心中を察した千冬の言に、真耶は思わず反発した。

「織斑先生……！ そんな言い方……！」

「モノならば、生きていてはいけないのか？」

——その事実を、客観的に受け止める。

言いたい事はそれで、彼らの人間性を否定してはいない。真耶は矛盾を収める。

——この話し合いが、上手く行ってくればいいんですけど……

そう願わずにはいられない真耶の眼前で、十蔵が話を切り出し始めた。

正義への道標 前編（後書き）

台詞が少ないのは、私の技量の問題なのか、それとも書き方の特徴なのか……？

いやあ、書いて分かったんですが、シリアスばかり書いていると息が詰まりますな……

各キャラらしさが——出てるかなあ、今（汗）。日常会話シーン書きてえ……

0～4話＋設定まで書きましたが、1巻序盤の学園編入編は7、8話位かな。

正義への道標 後編（前書き）

今回は、女尊男卑社会に関して独自解釈が入っております。
ツツコミ所があるかもしれません……（汗）

正義への道標 後編

眨めから寛大さへと急変した一連の会話に、二人がどうしたものかと戸惑っていると、目の前にいた初老の男が、柔和に言葉を紡ぎ始めた。

「初めましてですね、お二方。私はこのIS学園の用務員、轡木十蔵と申します」

「用務員、さん……？」

浩一にはそれが以外だった。

こんな場所で机の前に座っているから、てっきり一番偉い人だと思っていたのに。

「表向きは、妻が学園長を務めております。今の社会は、その方が色々と融通が利きますので」

「……」

思っていた事に返答された少年の顔が強張る。

目覚めた時には既に身柄を拘束されて、自分が知るべき事については、城崎共々真耶から教えられた。

「この世界と、プロトタイプ・ラインバレルに関する話は、山田先生から聞きました」

十蔵が眼を向けると、城崎は真摯な態度で語り出す。

「今の社会が、どうして女尊男卑になってしまったのか——」

開発は普及していったが——宇宙進出は一向に進まず、ISはスペックを持て余していた。

アラスカ条約によって戦争には使えないとはいえ、ISは世界各国が有事の際に備え、同盟や軍事協力を結んでまでも、互いのISによる侵略行為に対する抑止力として、いざという時の防衛力として、競って開発を行う国防の要である事には変わりはない。

加えて、篠ノ之博士がコアを四六七個以上作成する事を拒み、その製造方法が今だ分かっていない為、各国に割り振られた数少ない貴重品によって動くISに携わる者——特に操縦者は、選りすぐりが求められた。

これまでの兵器の例に漏れず、開発に多額の費用がかかるとなれば、それは尚の事である。

かといって、優秀な人材を確保する為に特権階級染みた好待遇を用意し、ISを専守防衛のみに使えば、”普段戦う相手がいないのに、殆ど何もしていないのに英雄扱いか”と世論の反発を受けるのは必至だった。

そうして、ISは人材の確保が急務である事を理解して欲しいという各国の思惑から、その力をより一層世界に知らしめる宣伝戦として、競技用の飛行ワードスーツとして扱われ始めた。

それだけならまだ良かったのだが――ISには、致命的な欠陥があった。

何故か、女性には使えないのである。

結果として、更なる性能アップの為に女性優遇の制度が次々と施行され、”ISを動かす能力を潜在的に持つ女性は、男性より優れた存在である”という選民思想染みた考え方が、十年間で広まっていったのである。

そうした横柄な態度を取る者はごく一部で、大多数の女性はある程度男性の立場を尊重して”女の為に男が”云々というレベルに留まっており、昔あった男尊女卑の価値観が逆転した程度だという。

だからと言って、一方的な態度や納得出来ない理由で下に見られるなど、自尊心プライドが高い浩一は”はいそうですか”と受け入れられはしない。

何より――

「ISが凄いつてのは――動かしたから分かる！」

俯き、忌々しく顔を歪めて吐き捨てた浩一の拳が、改めて強く握りしめられる。

「けど、だからって……この世界は、そんなのが当たり前になってるって言うのか……!!」

半年前まで無力感で何もせずに生き、望ラインバレルんでいた力を手にして、”特別な存在になったのだ”と一度増長してしまった――

そんな経歴を持つ彼にとって、これは決して許容出来る事ではなかった。

「早瀬君……」

「それで――俺達を、どうするつもりですか？ ”監視する”とか

言う為だけに、わざわざ呼んだ訳じゃないでしょう？」

城崎が気遣わしげな声を掛けた時には、浩一は顔を上げて、強い眼差しで十蔵を見据えていた。

無論ですと、初老の経営責任者が静かに告げる。

「――我々は、ラインバレルとそのコアの技術が欲しい」

解析の結果、プロトタイプ・ラインバレルのコアは既存ISのコア同様、その全容は多くが謎に包まれたブラックボックスだった。マキナの技術もISの技術も、現在での科学力では解明出来なかったのだ。

「早瀬浩一君。城崎絵美君――あなた達二人には、我々がプロトタイプ・ラインバレルのデータを得る為、来年度より本IS学園へ入学して頂きたい」

ファクターとはいえ、男性である浩一が動かせた事を考えると何らかの相違点があるのだろうが、解体して調べた所で、望む結果が得られる可能性は甚だ低い。^{はなは}

それは黒い機体や、血液を初めとした二人の各種サンプルから調べ

たDソイルについても同様。

異世界人である為にこの世界での国籍が無いのをいい事にして、二人を実験動物扱いしても結果は同じだろうというのが、この件に係モルモットわる大半の者達の意見だった。

「その為に必要な身分などは、この件について通達済みの各国政府の手で保障します。それに——迅雷を所持していた勢力に係わるのは、そちらとしても悪い話ではないでしょう」

あの無人機には、浩一が生まれ育った世界で運用されていたアルマに係わっていた。

つまり迅雷の所有者は、次元の壁で隔へだたれた異なる二つの世界についての情報を手に入れる事が出来ている。

この世界の技術力は、浩一の世界の様に、異世界へ行ける程発達していない。

ISを創り出した篠ノ之博士なら別世界への渡航が可能かもしれないが、彼女は自分が興味を示した人間以外はどうでもいいという社会不適合者である為、協力は期待出来ない。

二人が今までいた世界と、大事な人達の無事を確かめる為には、次元に関する——少なくとも迅雷の情報を確実に持っている謎の勢力に係わるしか選択肢が無いのだ。

何より——彼が”正義の味方”だというのはなら、理不尽な世界も、危険な集団も、野放しにはしないだろう。

十蔵は、机の上に山と積まれている書類の束を、浩一に向けて動かした。

「掻い摘むと——我々に協力する見返りとして、ラインバレルのデータ取りが終了し、何らかの形で次元渡航の技術が手に入り次第、そちらの世界とのコンタクトを兼ねて、あなた方を送り返すという内容になります」

「不明な点がある様でしたら、私がお教えします。後になって、話が違うという事が無い様に」

真耶がそう申し出ても、浩一はすぐには首を縦に振らなかった。

「……これは、契約ですか？ それとも脅しですか？」

この世界を見捨てるつもりなんて、最初からない。

それは、自分がそう在りたいものと、自分を信じて願ってくれた者達の気持ちに反する。

だからと言って、今まで不審人物の様に扱ってきた者達からいきなりそう言われても、すぐには踏ん切りがつかない。

城崎が自分にとっての異世界人であると加藤から聞かされた時、少しの間それが気になっていたから、警戒されるのは分かるが……

「脅しです。この条件を呑んで頂けないのなら、お二人の身の安全は保障出来ません」

「——ッ！」

せめて城崎だけでも、と彼女の前に身を乗り出すが、ガードマンの様に一步前に踏み出した千冬が、それ以上の行動を掣肘する。

「ですが……」

それをやんわりと制止するかの様に、十蔵が言の葉を紡いだ。

「私は、あなた方の意思が知りたいのです」

例え、自分達の意味を尊重出来なくとも。

否応無く此方こちうに従うのか。それとも――

それを、この場で自分に見せてくれと十蔵は言った。

「……………」

氣勢を削がれた浩一が城崎を見やると、彼女は無言で頷く。
後はあなた次第です、という様に。

十蔵も、真耶も、千冬も、ただ待った。

彼がこの対話について、どの様な決断を下すのかを。

「――分かりました。あなた達に、協力します」

千冬以外の三人が頬を綻ばせる中、浩一は不敵に笑い、左の掌を右の拳で打ち据える。
それは決して口だけの軽いものではなく、気概と呼ぶべきものが含まれていた。

「あれがラインバレルなら――どんな敵が来ようが、俺が全部倒してやりますよ!!」

「ほう？ 教師部隊共々吹っ飛ぶ危険を冒したというのに、大きく出たな？」
”正義の味方”？」

「うッ……！」

真耶を助ける為の無我夢中の行為だろうと、千冬は満足していない。あの状況ならば、起爆するだろうブレードでの刺突より、馬鹿力にモノを言わせて上空にブン投げるべきだった。

それをわざわざ伝える様な真似はしない。

正義の味方とやらを名乗るのならば、その程度は自力で気づいて身に着けて貰う。

「調子に乗らないで下さい！　いくらラインバレルの技術が使われた規格外機とはいえ、稼働率が低い今は、全力には程遠いんですから」

「わ、分かってるっつーの！！　ったく、盛り上がってるトコに水差しやがって……」

更には城崎にまで駄目出しを喰らい、浩一は不貞腐れる様にして頭を掻く。

そして、止めとばかりに十蔵の爆弾発言が待っていた。

「では、こちら全てにサインをお願いします。後程十倍の量を送りますので、そちらも」

「ええー……ー……！？」

「早瀬君！ それだけ用意するのに、この方々がどれだけ手間を掛けたと思ってるんですか！」

「け、けど……」

試しに何枚か捲ってみたが、どれも契約書らしく小難しい文面がビッシリと書かれている。

後になって”騙された”という事がない様に、この内容を全て理解してからサインしなければならぬ。

くっそー……

こんな展開になるなら、石神のオッサンみたく勝手に作ってくればよかったのに……

「わ、分からない所は私が教えますから！」

「全く……威勢よく大口を叩いておいていきなりこれとは、先が思いやられる」

わたわたと慌てふためく真耶を横目に見ながら、呆れたと言わんばかりにため息を吐く千冬に対し、浩一は剥れた様^{むく}な表情を作る。

それを歯牙にもかけず、千冬は少年のある一点を見つめると、ニヤリと笑った。

「態度は大きいのだが……なあ？」

十歳以外の四者の視線がそこに集中し、子猫の鳴き声が響いた――様な気がした。

「って！ 緒川さんと同じ事言うなよッ！！」

両手で男の急所を押える浩一の姿に、顔を赤らめて俯く城崎と真耶。それを見て千冬がクッククと声を漏らし、十蔵は人当りの良い笑いを浮かべていた。

そうして。

真耶の助力を借りた浩一と絵美が、契約書地獄との戦いを無事勝利で終えた後……のち

（ラインバレル、か）

各アリーナ共通のモニタールームで、千冬は同様に設計されたピット・ゲート前にあるカタパルトの映像に目を向けていた。男のIS操縦者という事で、初発進くらいは見てみたいと仕事を手早く片付けた十蔵も隣に控えている。

侍の姿をした、黒い異端の近接格闘型IS——R335『プロトタイプ・ラインバレル』

解析データによると、Sシステムや超高度装甲システムとのリンクの他に、操縦者が機体に搭乗したまま、移動元と移動先を繋いだ異空間を渡る事による瞬間移動——オーバーライドをイメージ・インターフェイスで制御する事で任意に行うのをコンセプトの一つとしている。

だが、試作機プロトタイプの名が示す通り性能が低い為、搭載されたカウンターナノマシンによって軽減出来る負担は小さく、連続転送も不可能だ。

その上、今は発動に関してはイメージ・インターフェイスとの接続が未完成であり、感情の昂りに応じて力を発揮するDソイルのシステムがそのまま使われていた。

他の武装は両下腕部にマウントされた鞘に納められた近接ブレードだけであり、現状では近接格闘型というより殆ど格闘しか出来ない機体と言った方が正しい。

ISコアには意識に似た様なものがあり、その好みによって拡張領域パストに量子変換出来る武装の種類が決まるのだが、学園にあるものを一通り試してみた所、どれも受け付けなかったのだ。

とはいえ、今後も主力武装は刀二本だけという訳ではない。

コアは自ら操縦者の特性を知ろうとし、それによる相互理解によって、機体性能が動かした時間に比例して引き出される。

活動・戦闘経験を蓄えていき、非限定情報共有によって得られる様々な情報をも自己進化の糧とし、それらを積み重ねると形態移行を起こし、外見や性能が変化するのだ。

パーソナライズ
ファーストフォーム
個人設定を適応した”第一形態”。

経験を積む事で能力を発展させた”第二形態”。

操縦者との相性が最高値に達する事で辿り着ける”第三形態”の三段階である。

単純な推測ではあるが、ファーストフォームであるプロトタイプ・ラインバレルは、マキナのラインバレルを基にした第二形態へと移行すると千冬は見ていた。

それによってエグゼキューターが使える様になり、オーバーライドとカウンターナノマシンの性能が上がれば、取れる戦術に幅も出てくる。

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力についても目星が付いているし、コアのデータベースに記載されていた情報を基にした専用装備を作成する準備も始まっていた。

更識の機体の開発元であるあそこなら、ナノマシンについての技術もある。

サードフォーム
後は第三形態だが、これについては考えても仕方がない。

セカンドフォーム
名称からして第二形態へは移行するとしても、既存のコアの様にそ

ここまで進化するという保証が無いからだ。

だが、桁違いの出力を誇るSシステムによってスペックは全体的に高められ、特にパワーと反応速度に優れている。

Dソイルによる修復は、装甲だけでなくバリアー残量の回復をも早めており、生半可な攻撃は通用しない。

目下の問題は、早瀬の技量にある。

実戦とはいえ、彼は三次元戦闘の経験が宇宙と地上で二回づつしかなく、攻撃が今だ力任せで動きも雑なのである。

無論初戦闘の頃に比べればマシになっており、場数と精神面の成長もあって度胸は付いているが。

城崎は、父親の天児博士が彼女を巻き込まない様にする為か、マキナ開発を含める仕事内容や政治的立場については別れる直前まで話しておらず、マキナに関する戦闘経験も知識も殆ど無い。

三機の迅雷が無人機であると看破したのも、拡張領域パススロットに入っている時、プロトタイプ・ラインバレルから教えて貰ったとの事だった。

言語による会話ではなく、コアからのメッセージが意識に直接伝わるという。

とりあえず、早瀬と城崎にだけでも男性が動かせる理由などを教えて貰う様指示した事もあるが、何故かはコア自身も分かっていない。無理矢理聞きだされた二人の口から発覚するのを恐れたのだろうか？
鵜呑みにする気はないが……

判明しているのは、マキナのラインバレルのブラックボックスに存在していた拡張領域^{パススロット}に、初期設定前の状態で量子化し収納されていた事。

自我が目覚めた際には、既に早瀬が装着しこの世界に来ていたという二点だけだった。

天児博士が死去した今、二人はおろか早瀬の世界の技術者達でさえ、マキナのラインバレルの全てを知っていた訳ではなかった。

マキナのブラックボックスの存在は否定しないが、プロトタイプ・ラインバレルというISの機体と技術——一体何物の手によるものなのか？

それはさて置き——

今は戦闘に関しては心もとないが、城崎には情報処理能力の才があった。

早瀬の世界に来てから緒川結衣に教授されたばかりの段階で、彼女が驚く速さでヤオロズの行動パターンを読み取り、一度戦艦フラッグの戦闘指揮を任されてもいる。

この世界で使われている機材が玩具に見える程のSシステムの処理能力と合わせれば、サポート方面で使える。

とはいえ、現段階ではラインバレルからの指示を受けながらシステム操作を行っているので、即応出来る様十分に知識を覚えて貰う必要があった。

現に先の迅雷戦では、早瀬が目覚める頃には意識を取り戻していた様だが、それからシステムの微調整を済ませるまでに時間が掛かっている。

あの記憶データが真実であれ虚偽であれ、向こうが表向きそういう態度を取るのなら、敵意を見せずに対応しつつ、不審な行動を取らない様警戒を怠らなければいい。

身元不明の相手に対して、比較的人当りを緩くしているのもその為だ。

もしデータ通りの少年少女だとするのなら、必要以上にストレスを与えて、ラインバレルの運用に影響が出て困る。

早瀬浩一と城崎絵美、そしてラインバレル――

この世界に救済を呼ぶ神なのか、破滅を齎す鬼なのか。それは、自分自身の眼で見極めさせてもらう。

鋭くモニターを見つめるそれは、教師というより戦士としての眼だった。

「もう心を許し始めている様ですな、山田君は。中々良い子達ではないですか」

「気を緩めないで下さい」

否定する様に、ぴしゃりと言を叩きつけた。甘いとも彼女らしいとも思うが。

「どちらにしても、アレはまだ未熟者です。信頼するには足りません」

初老の男が、小さく忍び笑いを漏らす。

信頼は出来ないと言ったが、信用はどうなのか。

そして、彼女が二人に抱いている感情は期待なのか、それとも不審なのか。

十蔵は、確率が高い方に賭けていると思っていた。

『足元にある、偏向重力カタパルトに両足をセットして、足首と膝、腰を曲げて前のめりになって下さい。射出する際のGが和らぎます』

「はい」

通信で意識に直接届く真耶の指示のままに前傾姿勢を取ると、眼前に『Ready』と表示された空中投影ディスプレイが浮かんだ。今まではウィンドウでお互いの顔を見ながら会話していたせいか、浩一はどこか寂しいというか、少し物足りない気持ちになる。

IS学園には、模擬戦闘などを行う為のアリーナが六つ建造されている。

浩一達がいるのは可動式の屋根を持つ第二アリーナであり、ステージを特殊な遮断エネルギーシールドで隔絶して消音、更に屋根を閉じる事で第三者から目撃されない様になっていた。

プロトタイプ・ラインバレルの性能実験と、入学の際のランク付けを済ませる目的で、今日から生徒の使用時間が過ぎた夜間のアリーナを密かに使用し、真耶と模擬戦を行う事になっている。

ランク付けは本来訓練機で行うらしいのだが、試しに学園に配備されている機体に乗ろうとしてみた所、うんともすんとも言わないのだ。

城崎は、何の問題もなく装着出来たのだが……やはりマキナのラインバレル同様、この機体が特別という事なのだろう。

『推進ユニット・コントロール・システム、シールドバリアー、スラスタ―出力安定――問題ありません』

その城崎は拡張領域^{パススロット}に入り、たった今完了したプロトタイプ・ラインバレルのチェックを行っていた。

学園側の誰かが整備してくれたという事だが、だからなのか、迅雷と戦った時よりも身体が軽い気がする。

『了解――ラインバレル、どうぞ！』

真耶の発進指示と共に、プロトタイプ・ラインバレルの両サイドから立体映像のコースが浮かび、道を作っていく。

「了解っ！」

今回は、邪魔する者は誰もいない。

森次の横槍で、オペレーション・モニターニャ・ペリグロッソで言えなかった台詞を決める。

「ラインバレル————早瀬、行きます！」

ディスプレイの文字が『GO』に変わった瞬間、カタパルトがレールの上を高速で滑り出し——

シャトルで宇宙に打ち上げられた時に比べたら、どうという事は無いGを身体に感じながら、浩一は始まりの場所へと飛び出していた。

正義への道標 後編（後書き）

次話は少し時間が掛かるかもしれません。

原作・アニメなどで、各キャラのセリフや心理描写を、出来る限り、より違和感が無いものにしたかったので。

邂逅（前書き）

最近、PSPゲーム版を時間取ってセリフをメモっていく前に、一度一周クリアして内容を把握してしまおうかと思う今日この頃。自分の力不足が恨めしい……くそう。数をこなしていく内に腕が上がるはず……

私は諦めない。本編突入まで後1話！

邂逅

操縦者に対し最適化^{フィッティング}したISは、待機モードとしてアクセサリーの形状を取る事が出来る。

誰もいない第二アリーナ・Aピット。

浩一は私服（と言っても、サイズを聞いた真耶が城崎のものと一緒に買ってきたのだが）ズボンのポケットに挟んでいたネクタイピンを右手で取り出し、握りしめた。

「来い！ ラインバレルツ！」

右手を突き上げ、いつもの叫びを上げた刹那――

――^{スキンバリアー}皮膜装甲、展開。

宇宙作業というISの本分を果たす為、操縦者の全身を包む特殊なエネルギーバリアー。
ネクタイピンを握る右の掌から、薄い膜が肌の上に直接広がっていく。

——スキンアーマー装着、Dソイル展開^{オープン}。

身体全体から弾ける様に溢れた光の粒子が、放出元へと瞬時に再集結し、纏まったそれが黒い侍の装甲を成す。

展開済みの皮膜装甲と、機体各部のエネルギー・バイパスに固有ナノマシンが配列され、一つのシステムを作り上げていく。

——ファクター体内、エネルギー・バイパス・オペレーティング・システム、超高度装甲システム、皮膜装甲^{スキンバリアー}……全リンク正常、Sシステム起動。スラスタ作動。

全身に力が、活力が漲る全能感。次いで身体が軽くなる無重力感。

——ハイパーセンサー、接続完了。

世界が繊細になっていく様な清涼感が、視界を中心にして全身の隅々まで行き渡り、360度全方位が『見える』様になる。

ピット内の機関が上げる唸りが、何処で、どんな波長で発生しているのかが微細に聞き取れる。その音量、照明の光量、正面にあるピット・ゲートまでの距離——数値として意識に浮かぶそうした状況が、まるで見慣れたものであるかの様に意味が理解出来る。

プロトタイプ・ラインバレルを装着した浩一の身体は、ピットの床から数センチ浮いた状態で静止していた。

「……よし。もう、大分馴染んできたな」

浩一は右手を目の前まで持ち上げ、二回握って開いて、感覚を確かめる。

ISの装甲は、鎧の様に身に着けるのではなく、操縦者の身体と融合する様に一体化する。

故に、この世界に来たばかりの時は、この機体をいきなり着けていた自分は化け物になったのかという疑問が沸き起こりもした。

プロトタイプ・ラインバレルというISがどういうものなのか、コアから教えて貰わなければ恐怖心でパニックになっていたかもしれない。

だが、実戦・模擬戦・訓練で黒い侍を動かしてきた浩一は、この機体に対する懸念と警戒心が薄れつつあり、精神的にも馴染んでいくのを自覚していた。

今の自分がこの機体のファクターであるという事実だからなのか、コアから自分に――自分と城崎に力を貸してくれる様な意思を感じている。

マキナという機械に変身したみたいだった今までと違って、自分自身が魔法使いか超能力者になった様な気分だ。

何と言うか、こいつは大丈夫だと安心出来る。

その事を話してみたら、ISに備わっている操縦者の生体機能補助

で、コアが協力している気にさせて利用しているのではないかと疑いを持たれた。

だが、調べたら脳内物質をその様に操作してはいなかったというし、城崎も同じ様に感じているという。

協力してくれているとして、その理由が分からない以上、いくらラインバレルの技術が使われているとはいえ、全幅の信頼は置けないと思う。

だが、自分達には拒否権はどっちみち無く、全容が分かっていない機械というならマキナだってそうなのだ。

それに散々乗った身としては正直今更だし、何年も使っているという千冬と真耶には、悪くなっている点は特に見当たらない。

考えても仕方がないだろう。好き好んで嫌いになりたくもない。

「さてと……城崎は、まだ来てないのか」

ズーム・ビュー
視覚補足拡大映像でピット・ゲートの向こう側をみるが、いるのはリヴァイヴを装着した真耶だけだった。

この数日間、浩一は真耶からISの訓練を受けつつ、その成果を模擬戦で試すというローテーションを繰り返していた。

マキナの思考操縦機能が使われているプロトタイプ・ラインバレルは、今まで通り、自分の身体を動かす感覚で簡単に操縦出来る。

真耶曰く、リヴァイヴ以上の簡易性だという事だった。

ただ、飛ぶだけならそれで十分だが、試合や実戦ではそうもいかない。

マキナとISでは、戦い方も身体にかかるGも違う。

迅雷の時は、城崎のおかげで相手の動きが分かっていたから対処出来たが、一対一の試合でそれをやるのは反則とされたし、彼女が常に傍にいるとは限らない。

模擬戦の結果は、言うまでもなく全敗。

アサルトライフルは削った傍からエネルギーシールドを回復され効かないとみるや、連弾を近距離で叩き込まれた。

距離を取って隙を伺えば、移動・回避先を読まれて手榴弾を投擲される。

未来予知でも出来るのではないのかと、真剣に疑ってしまう。

その真耶は私服姿の浩一と違って、ワンピース型の水着やバレエ選手が着るレオタードの様な格好をしている。

詳しい原理は忘れたが、聞いた話だとISスーツといって、ISはあれを着ていないと操縦者の動きに対する反応が遅れてしまうらしい。痛みは消えないが、拳銃の弾丸なら受け止められるとも聞いている。

らしい、というのは、ファクターである自分と城崎は、体内のDソイルが同じ働きをするのでISスーツが必要なく、着る前と後で変化を確かめられないからだ。

と言っても、ファクターの場合はどの様に影響するかのデータを採取する為に着用を命じられているが。

「……………」

サイズが合わないせいか、真耶のISスーツは胸元が大きく開いており、訓練の度にそれを意識しては、拡張領域内の城崎に叱られるか、お決まりの台詞を喰らうかのどっちかであった。

別のピットにいる城崎の方へ意識が向いているのか、全方位視界接続でもこっちに気づいていないらしい。

(うっひゃあ……！)

思わず視覚補足拡大映像でアップにしてしまう真耶の巨乳は、ハイパーセンサーの補正によって、くつきりはつきりとより鮮明に映る。

(も、もうちょっと……もうちょっと、だけ……)

常日頃から煩惱塗れという訳では無いが、悲しいかな、彼も一人の十代男子。

スイッチが入り調子に乗った浩一の口元が、うへへ、とだらしなく緩みっぱなしな時……

「…………ツツツ！？」

気づいた素振りを見せた真耶が、顔を耳まで真っ赤にし、両手で庇う様に胸元を覆い隠して、身体を浩一から見て横に向けた。

（あっ!! し、しまった……!!）

ISを装着してるって事は、山田先生も視覚補足拡大映像でこつちズーム・ビューを見れるって事じゃないか！

早瀬君はどうでしょう、とこつちを見て気づかれたとしても、全然おかしくない。

『————最低です』

冥府の底から響いてくる様な声で、更なる追撃が炸裂する。

「ッ!? き、城崎ッ!?」

オープン・チャネル

解放回線での通信だった為か、真耶が『えっ? えっ?』と向こう側のピット・ゲートと自分の方を交互に見やる。

だが、浩一の意識が向いているのは、スーツ共々ISを装着してステージへと出て来た城崎絵美の方だった。

強化外装・六一式『打鉄^{うちがね}』。

千冬が専用機として使っていた第一世代型IS『暮桜^{くれぎくら}』の基本設計データを基に量産機として開発された、日本産の第二世代型ISである。

刀型近接ブレードを基本武装とする近接両用型であり、火力に難があるが、第二世代型IS中最高の防御力を持ち、操縦が不慣れで回避行動が取り辛い初心者が扱いやすい。

また整備がしやすい為、訓練機や新武装試験機としても優秀で、多くの企業・国家、このIS学園でも使われ、ラファール・リヴァイヴをも上回る世界第二位の市場占有率^{シェア}を持つ。

学園に訓練機として一番多く配備されているのも、この機体だった。

その操縦者である少女が、ゴゴゴゴゴ、という擬音が聞こえてきそうなお迫力で、ジットリと睨む。

心なしか目元に影が差している様に見えた浩一が、恐怖で短く声を漏らす。

五十五口径アサルトライフル《ヴェント》^{コール}を呼び出した真耶が、涙目になって浩一を睨み――

「私だって、怒る時は怒るんですよ！！
早瀬君、お仕置きです！！」

「なあはーーーーー！！！」

二人がかりで滅多打ちにされる浩一の映像をアリーナ・カメラで見た千冬が、重い溜め息を吐くのだった。

「あなたの、ご家族の所へですか？」

「そうだ。学園に入学するまで、あいつと共同生活を送って貰う。私の家でな」

エネルギーシールドに護られていたとはいえ、近接ブレードの刃とアサルトライフルの弾丸をしこたま喰らった衝撃に背中をさする浩一が、絵美に冷たい態度を向けられていると、二人に会いに来た千

冬がそう話を切り出して来た。

プロトタイプ・ラインバレルのデータ採取が一段落したので、それを解析している間に交流を深めておけと。

「いいのかよ？ 俺達まだ信用されてないんだろ。あんたの家……だッ！？」

族と一緒にして、と最後まで言う事は出来なかった。

千冬が手にした書類の角を以って、浩一の頭頂部、その正中線上を正確に叩いたのだ。

鈍い音の後、両手で頭を抱えた浩一が蹲^{うずくま}る。

「心配は不要だ。それよりも、目上の人間には敬語を使え、馬鹿者」

「痛ッ………言われなくなたって、普段から使ってるっのー！！俺の記憶見たんだろ！？」

再度の打撃。舌を噛まないタイミングを狙ったのは、情けというよりも話が進まないからである。
おおおおお、と悶える浩一を見下ろしつつ、千冬は睨みながら命ずる。

「口答えは聴かん。私の事は”織斑先生”だ」

「……………分かりましたよ……………」

新たに一番痛み出した頭をさすりつつ、浩一は不承不承の体で承諾し立ち上がる。

織斑千冬——服の上からでも分かる、無駄のない引き締まった体。そして、まるで狼の様な鋭い目。

見るからに漂わせている厳しさが女らしさを覆い隠しているせいか、浩一と絵美の上司である森次玲二を彷彿とさせる女性だった。着ているのも、男物と女物の違いがあるとはいえ黒スーツだ。

異世界の人間である二人は、不審に思われない様にと、この世界に関する一般的な知識——白騎士事件などの今まで起きた大きな出来事や、有名店舗名など——も覚えさせられた。その中には、織斑姉弟に関する情報も含まれている。

彼女は『モンド・グロツ』という、IS世界大会の第一回で優勝した無敗の猛者であり、今はこの学園で教職に就いている事。その弟が、少し前に男性でありながらISを動かし、来年から入学する事が決まっている事も知っている。

二人とは殆ど言葉を交わしていない為、真耶と比べると今はそれ程好意的な間柄ではない。

下ネタでからかわれた一件もあり、思わずタメ口を聞いてしまった浩一はしっかりと制裁を受け、生真面目な絵美は今から生徒の様に挙手して質問する。

「あの、織斑先生。先程、弟さんと生活しろと言われたと思うのですが」

「ああ。生活の心配は必要ないぞ。あいつは家事は得意だ。任せておけばいい」

「任せる……って、洗濯物もですか!？」

「っ……!!」

その意味に気づいた絵美が顔を赤くすると、浩一は食ってかかった。

「いくらなんでも問題でしょう、それは！ 普通親御さんに任せ……」

「――親はいない。私の家族は、あいつだけだ」

その鬼気迫る表情と声音で、二人は理解した。

千冬に――織斑姉弟にとって、家族の話題は禁忌^{タブー}であるという事を。

落ち着ける様に息を吐き、千冬は冷静さを取り戻した。

「……………安心しろ。あいつは昔から私の服を取り扱っている。今更女の下着くらいでどうこうならん。早瀬」

「あ、はい……」

「あいつ一人なら、個室の用意に一ヶ月はかかったが、お前が加わり相部屋へ入れやすくなった。ルームメイトになる、問題を起こすなよ。それと……」

一切の緩みを持たぬ目に、浩一は思わず息を呑む。

「あいつは未熟者だが、何故か女心を刺激する奴でな」

「は？」

女教師の口元が、人を食った様にニヤリと笑む。

「――油断していると、城崎を盗られるぞ？」

「んなッ!？」

「――っ！」

大口を開けて固まる浩一と、先程とは違う意味で頬を赤らめる絵美。

その二人を横目に見つつ、千冬はクックククと笑いながらその場を去って行った。

織斑家は、千冬が格安で買った中古物件である。

だが、掃除や手入れが行き届いている為、”古臭い”や”ボロい”といった汚い言葉とは真逆の、綺麗な”普通の家”だった。

とはいえ、これからはそれも出来なくなるだろうが……
そう思うと、一抹の寂しさというか、残念さを禁じ得ない。

「はぁ……」

ソファーにもたれかかる千冬の弟・織斑一夏は憂鬱だった。

今から約二週間前。

昨年起きたカンニング事件により、各会場は二日前に通達されると
いう政府の無茶苦茶なお達しを受けた二月中旬。

何で一番近い所へ行くのに四駅も乗らなきゃいけないんだと文句を
こぼしながら、一夏は寒空の下を歩いていた。

私立藍越学園を受験する為だ。

卒業生の九割が学園法人の関連企業に就職する為に、私立校であり
ながら学費が格段に安い。

しかも地域密着型の優良企業が多く、突然僻地に飛ばされる心配も
無い。

そして自宅から近い。彼にとって最高の環境だった。

とある事情で両親がいない一夏は、年が離れた千冬に養って貰いな
がら生きていた。

正直に言ってその事には長年引け目を感じており、昔からやってい
た剣道を止めてバイトに励んだのだが、それはお前の小遣いに使え

と言われてしまっている。

職業不詳で月に一度しか帰らない姉だが、稼ぎが良いので家計の心配はしていない。

だが、それが無理をさせている様で余計に心苦しい。それで参る様な女ではないと分かっている。

少しでも楽をさせてやりたいと、中学を出たらすぐに働くつもりでいた。

行ってしまうば、千冬の為と言うよりも自分がそうしたかったのだ。

”社会を甘く考え過ぎだ、馬鹿者”と腕力に勝てず受験生となった訳だが、ここに受かりさえすれば就職は決まったも同然。

春から始めた猛勉強で、模試判定でAを勝ち取っている。普通に受ければ普通に受かる。

そんな訳で大した緊張もなく、試験会場の多目的ホールへと入り――

迷った。

「何だよ、ここは……」

会場は迷路としか思えない分かりにくい構造をしており、何故か案

内図が無かったのだ。

どうやって二階へ行くのかすら分からない建物とはいえ、中学三年で迷子は恥ずかし過ぎる。

「……よし、入っちゃえ」

俺はこれで大体正解なんだと、次に見つけたドアを開けて中へ入った。

忙しいからか、より神経質そうに見えた女性教師に、” 時間が押しているから急げ” とカーテンの向こうで着替える様に指示される。

四時までしか借りられないなんて何を考えているのか、と愚痴っていたが……あの時は、着替えはカンニング対策だろうと考えていて。

——それが何故こんな所に運ばれているのか、疑問に思った。

「IS……?」

侍が身に着ける鎧の様な機体は、主につゝみ跪く中世の騎士の様に鎮座していた。

自分にとっては意味があるが、男だからただの置物と同じでもある、超技術の産物。

――の、筈だった。

何故かは知らないが、姉がIS絡みの事をとにかく見せようとしなかったから。

隠れてこっそり見た映像に移る織斑千冬が、格好良かったから。

そんな興味本位で触れたISが――

まるで、自分の手足の様に動いた。

知りもしないのに、習いもししていないのに、意識に直接送られてくる情報の全てが理解・把握出来た。

そうしてISを通して見る世界は、まるで――

後になって知った事だが、あそこは公立IS学園の受験会場で、あの機体はテスト用として使われていたらしい。

藍越^{あいえつ}とISの響きが似ているからとはいえ……なんでそんな間違いをしたのか……

あの日を境に、自分の世界は一変した。

——まずマスコミが取材に来て。

「君を知った時は震えたよ。私の前には今、新しい時代が人と言う形を以ってここにいます。たった一人の男が手にした力で、政策が覆^{くつがえ}される……だが、世界は綺麗事だけではない。君と、君の力による影響を快く思わない者は、当然出てくる。様々な蠢^{うごめ}きが起ころう」

「……まあ、そうですね」

自分の立場を脅かされる事を恐れる奴。憂さ晴らしに八つ当たりで権力を振るう奴……

そうした者達の悪意で、見知らぬ誰か——男だろうと女だろうと——が傷つけられると思うと気に食わないが、一介の中学生でしかな

い自分に何が出来るといのか。

俺自身、最悪また誘拐されるか暗殺される可能性もあると聞かされている。

だから、俺を保護すると言って来た黒服男達がI S学園の入学書を置いていったんだろうし。

四六時中S Pか何かが付くか、どこかへ護送されるかと思ったのだが、そういう特別扱いはいいつが言った様な奴等の不快感を返って助長するという事で、影で護衛するから普通に生活しろと言われた。今も自宅にいられるし、入学から一週間はここから通えと。

「織斑君……君は焼きが回ったこの世界に、混沌カオスを満たす素晴らしき素材だ。世界はこうでなければ……フフハハハ……!!」

コイツヤバイ!!

——わざわざ各国の大使が来て。

「君は我々にとって希望の光だ。その姿を、この目で見たかったのだよ」

「それは、どうも……」

「男のIS操縦者は、この上ない悲願だった。女性にしか使えない限り、どうする事も出来なかったのだ。そんな時、君が舞い降りてくれた」

………舞い降りたって、凄げえなオイ。

「織斑君——君はまさしく、世の男性諸氏の天使だよ」
エンジェル

普通に引いたわ。というか天使って何だ、何か小物臭い言い回しだったぞ。

——他の男達もISを使える様になる為に協力して欲しいと、遺伝子工学研究所の人間まで来て。

「織斑君。君も”何故こんな事になったのか”……”何故こうも理不尽な世界になったのか”と、実に腹正しい思いをして来ただろう？」

「いえ、俺はそれでも……」

そうした苦手な手合いに会った事はあるが、幸い周りが良い人達だったから、それでストレスを溜め込む様な事にはなっていない。

「それが今の世界だ。女尊男卑政策によって、彼等は何の言われも無く貶められ、彼女らは与えられた力に惑わされ、本当の自分も、果たすべき役割も知る事が出来ず、ただ流されるままに日々を生きている」

いや人の話を聞けよ。というか、勝手にそう決めつけるな。

俺が男らしくないだの、知り合いが人を見下してる嫌な女だのと侮辱されたみたいで気分悪いだろうが。

「私は、権利に溺れた女性達を不幸だと考えている。どの様なものであれ、手にした力は正しく使えば、どれだけのものを得られるのか分からないというのにな……」

「はあ……」

それはまあ、俺も思う。何の道理も無く振りかざす力なんてただの暴力だ。そんな事をするよりは、正しく使って全うな人間関係を築く方が良いに決まっている。

けど、今生きてる女が、皆が皆間違った生き方をしてる訳じゃないだろう。IS関係の力を正しく使う、尊敬出来る人だっているのだ。現に、自分もそうやって助けられたのだから。

俺が辛い思いをしながら生きてきただろうとか、今の人間達は世界に負けっぱなしだとか、決めつける様な言い方がどうも癪に障る。^{しゃく}

「私はね、遺伝子に通じた自分の能力を役立て、満ち足りた幸福な

世界を作りたいのだよ。夢物語だと言われているがね。だが、必ずや実現してみせる」

それは立派だとは思うが、先にそのワンマンさをどうにかしてくれ。自分の考え方こそが絶対だ、って言ってる様にしか見えねえよ。

「――その為にも、君の生態を隅々まで調べさせて欲しいのだよ」

お断りだ馬鹿^{バカ}。

……………何とか、どいつもこいつも目元を黒くベタ塗りしてやりたい連中ばかりだった。

重要人物になったと言うなら、もう少しまともな性格の奴を送れなかったのかと思う。

一夏は、机の上に置いてあるビニール舗装済みのIS学園の制服に目を向けた。

「どうするべきかねえ……」

とは言っても、学園への入学は既に決まっている。

実姉の手で入学手続きが済まされているし、殺されるだの実験動物^{モルモット}扱いされるだというのは、一夏自身真っ平御免だ。

千冬曰く”普通の高校と大差ない。日々が充実するかはお前次第だ” そうだが……

「女ばっかったのがな……」

友人の五反田弾からは、羨ましいだの良い思いしやがってだのと散々言われているのだが、出来るなら是非とも代わって欲しい。今は彼女作りに興味は無い。

おまけに、優秀な操縦者の卵を保護するという名目で、IS学園は全寮制。

世界的なニュースになったから、知らない奴扱いというのは多分無いだろうが……学び舎でも住居でも女子オンリーという環境で、気が休まるとは思えない。

ただ女子高へ行くならともかく、そこで三年間暮らせと言われて喜ぶ男はいないだろう、普通は。色々とやりにくくてしょうがない。

「せめて、もう一人いれば……」

気兼ねなく話せる相手が欲しい。

どう接すればいいか分からなくて避けられるとか、生意気だと見下されて嫌われるとかして友達が出来ないのは、普通に嫌だ。

まあ、仮に『ISを動かせる男子』が新しく出てきたとして、そいつが自分と同じ様な思いをするのかと考えるとあれだが……

そこまで考えた時、開けっ放しにしてしまっていたドアから、ガチャリと玄関の鍵が開く音がする。

人によっては泥棒か何かを疑うだろうが、ずっと共に暮らしてきた一夏には、入ってきた者は唯一の肉親だという事が察せられた。

鞆を持ってやろうと重い腰を上げる。

夕食はどうしたのか、まだなら作るが何かリクエストがあったとして何を言われるか——などと考えつつ、一夏はドアの方へと目を向けた。

「おかえり、ちふ——」

ゆ姉、と言おうとしたその口が止まる。

織斑千冬が返って来たのだという彼の予想は当たっていた。

しかし彼女とは別に、二名の来客がいたのである。

それも、自分と同じ年頃の子供という、どういう関係なのかという組み合わせで——

邂逅（後書き）

漫画版・アニメ版ではそうではありませんが、真耶のISスーツデザインは原作での描写通りとなっています。

今作での一夏は原作小説・漫画版でのツリ目ワイルド風で、時折ジヨークを挟む事はしません。

私のレパートリー的な問題で……（汗）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8410s/>

鉄のストラトス

2011年11月18日06時19分発行